

——日々是鬪笑！——

## 『広目屋日記』

作・三谷智子

### ●登場人物

辰野 長吉 (たつの ちようきち) チンドン屋 『辰の家』の親方

辰野 ハナ (たつのはな) 長吉の妻

辰野 清 (たつの きよし) 長吉の息子

中村 誠治郎(なかむら せいじろう) コロスの出方

中村 ウメ (なかむら うめ) 誠治郎の妻

工藤 タキ (くどう たき) 三味線の出方

和田 茜 (わだ あかね) 辰野家に住み込みの子方

岩城 寅雄 (いわき トラお) テキヤ／ハナの弟

三筋 源太 (みすじ げんた) テキヤ／寅雄の弟分

関口 啓子 (せきぐち けいこ) 第一高等小学校教員 清の元担任

江藤 正義 (えとう まさよし) 長屋の大家／在郷軍人

絲川 夢子 (いとかわ ゆめこ) 時々解説員

刑事

号外売り

盆踊りする人々

明仁親王誕生を祝う人々

●時 昭和八年六月より十二月

●場所 旧 南葛飾郡 寺島町 / 現 墨田区東向島 界限

※舞台はシンプルに。街角、屋内など、多様に対応できる物がよい。但し、舞台中央奥辺りに柱が一本ある。

■開演■

舞台上に釈台。解説員の絲川夢子が、張扇を手に登場。釈台を前に座り、恭しく首を垂れる。

絲川 本日はご来場賜りまして誠にありがとうございます。これよりご覧に入れまする演目は日々是鬭争。いえ、鬭い笑うと書いて(張扇で釈台を叩き)「日々是鬭笑 広目屋日記」でございます。

(以降、要所で張扇で拍子を取りつつ)さて、広目屋と申しますのは今で言う路上の代理広告宣伝業「チンドン屋」。その起源は江戸中期の飴屋の飴勝とも言われます。そして東西家勇亀、丹波屋九里丸、秋田柳吉の楽隊広告などに受け継がれ、奇席の宣伝、ビールに仁丹、なんでも。口上、鳴り物、工夫を尽くしてお披露目したのが広目屋に「ございます」。

華々しい明治は終わり、世界恐慌、大震災と憂き目にあいながら、この作品の時代、昭和八年も、いつしか「チンドン屋」と呼ばれて生きております。当時の日本は、支那と戦争を始め、国連脱退。「今何時？」と聞けば「非常時」と答える。そんな笑えないナンセンスが大流行。

こんな時代の東京下町。チンドン屋、辰の家一家を中心に繰り広げます人情悲喜劇。

役者、裏方、熱き心もてあい務めますれば、いずれ様にも相も変わらぬ熱烈なる「声援の内に」。

糸川が一礼し、木が入る。糸川去り、釈台も取り払われるとそこは昭和八年の寺島町の街角に。

■その一 六月■

長吉のチンドン太鼓を皮切りに、「クロス」の誠治郎、三味線のタキが演奏しながらやって来て立ち止まる。時々車の音。中央奥辺りに電柱にも見える柱一本。

長吉と誠治郎、時々チンドン太鼓、「クロス太鼓を鳴らしつつ口上を述べる。タキは仏頂面で棒立ち。

長吉 とぞい、とぞい！私、辰の家長吉、本日お集まりの皆様にお煙草のご紹介に参じりました。

「ご紹介いたしますのは、その名も美しい「チエリー」

誠治郎 チエリー！

長吉 こくのある苦味とかすかな甘み。そして、甘さと辛さの共存。「ゴールデンバッター」

誠治郎 ゴールデンバッター！

長吉 「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」。敷島、大和、朝日、山桜は、国を思う心と同じ

確かな味わい。いずれもお買い上げの一部が国防献金となるといいますから、あなたも、あなたも、

この非常時に、煙草を吸ってお国のお役に立ちましょうではありませんか？

長吉 (急に芝居がかって)おせい、行ってくるぜ

誠治郎 あいよ。アしお前さん、大事な物をお忘れだよ。(煙草を懐へ)煙草はいい男の嗜みさ

長吉 そして良き煙草を夫に勧めるは女の嗜み

長吉 皆さま、ずずいーつと、「愛煙

長吉・誠治郎 御願ひ奉りまする〜っ！

タキが大あくび。長吉と誠治郎、タキを一瞬気にするが、長吉の打ち込みに始まり、演奏しつつ街廻りを再開。一回りして神社の境内らしき所で休憩となる。楽器を降ろしつつ

誠治郎 イヤー、どっこいしょ。歩いた歩いた。しかし、今日はどっつやら持ちそうじゃないかい？

長吉 ああ

誠治郎 このまま降らなきゃいいがねえ

長吉 おい、おタキさん、ありゃねえじゃねえか

タキ は？

長吉 はっじゃねえよ。俺ら一生懸命しゃべって芝居してんのに、欠伸しやがって。突っ立っても休憩じゃねえぞ

タキ じゃ、何すりゃいいのよ

長吉 な、誠治郎がやってるみてえに、いい間で、シヤンシヤンと入れりゃいいだろ

タキ 生まれつき間の悪い女でね、却ってお邪魔だから大人しくしてんですよ

長吉 だったらせめて愛想よくしてくれよ。そんな仏頂面じゃ誰も寄り付かねえよ

誠治郎 まあまあ、あれだよ、疲れてたんだろ？寝不足だったんだろ？

タキ いや。バカバカしくて勝手に欠伸が出ちまったんだよ

長吉 何だよ

タキ だってバカバカしいじゃないか。大して人も通らないのに、大仰な口上と下手な芝居。人が大勢いる時を見計らってやればいいじゃないか

長吉 音でもって口上でもって、遠くにいるお客様を引っ張り出して、見る気にさせ買っ気になせる。それがチンドン屋の本文なんだよ

タキ そりやすいませんね。アタシは、ただ三味線弾けばいいと思って引き受けたもんだから。こつこつ仕事とは聞いてなかつたんでね

長吉 こつこつ仕事って何だよ。

誠治郎 まあまあ

長吉 アンタ、この仕事バカにしてんのかっ

タキ してないよ

長吉 じゃあこつこつ意味だ

誠治郎 やめなよ親方、まだ仕事だよ。タキさんも仲良くやろうよ。いい仕事じゃないか。三味線弾いて愛想振りまいてニコニコしてりゃあ人様のお役に立つんだから。笑顔笑顔

と、タキの両頬を持ち上げる。抵抗するタキ。

長吉 いくぞ

タキ もう？

長吉 充分だっ

タキ 腕と脚がパンパンで

長吉 みんな一緒だよ。俺らアンタの三倍必死にやっつてんだからな。もつとだ

誠治郎 ね、仕事なんだから頑張ろっ

長吉 そうだ。手間も払ってんだから

誠治郎 そつそつ

タキ フン、一円四十銭で偉そつに言っない

誠治郎 一円四十銭？

長吉 ……いいから行くぞホフッ

一同、神社の境内から出て行く。誠治郎は「アレ？親方、一円四十銭？」とどぎどぎする。すると急に雨。一瞬茫然とする三人。が、タキが「ひゃー」と三味線をかばいつつ走り去る。

長吉、誠治郎も続いて走り去ると共に暗くなる。雨は降り続き、音楽。

溶明すると長吉の家。誠治郎の妻のウメと、第一高等小学校の教員、関口が框に座って話している。

ウメ そうですか。植木屋のマーちゃんが。まあでもあの子は丈夫ですから、すぐ良くなるでしょう

関口 そうだといいんですけど

ウメ 本当に優しい先生だ

関口 いえそんな。マサミツ君、教科書全部置いたままだったので。お見舞いも兼ねて届けに来たんですわ

ウメ (笑)この辺の子はみんなそうでしょう。ウチで勉強する子なんて滅多にいない

関口 そうなんですか？

ウメ ええ、学校終わったら家の手伝い。仕事見つけて働いてる子もいるし。勉強する暇がねえ。

キヨちゃんは知りませんよ。あの子はウチでも勉強してたんじゃないかねえ

関口 …清くんは、どっしてるんですか？

ウメ どっかって、働いてますよ。

関口 千住の製紙工場でしたよね？

ウメ ああ、あれは辞めたの。今は浅草で給仕

関口 え？

ウメ それまでも幾つか変わってね。そのたんびに親方と大喧嘩ですよ。まあキヨちゃんも意地になってん  
でしょうね。(にじり寄る)知ってるかもしれないけど、後妻のハナさんがあめいっ人だからキヨちゃん  
と合わないの。そりゃそうですよ。前の奥さんは本当に優しく、三味線も料理も上手くてね。

それが亡くなって三月やそこらであの人が来たんだから。キヨちゃんにしたら許せませんよ。  
師範学校に行けなくなったのもあの人の弟が

ハナが何か買い物をして帰って来た様子。二人の話を聞いている。

ハナ 弟が何だい？

ウメ あ、ハナさん。お邪魔してます

ハナ お邪魔してますって毎日来てんじゃないか

ウメ へへ。雨だから、そろそろ帰るかと思って

ハナ 自分んちで待ちなよ

ウメ そんな事したら。油断も隙もないんだから

関口 あの、お邪魔してます

ウメ ああ、キヨちゃんの担任だった、えっと…

関口 関口です。前に一度ご挨拶させて頂きました

ウメ 誰もいないんだから、待つてもらってたの

ハナ それは、あいすいませんね。今日は何か

関口 清くんにちよつとお話があつて。待たせて頂いても宜しいでしょうか？

ハナ まあ、構やしませんけど。いつになるか分かりませんよ。仕事終わってたってフラフラしてますから

ウメ この雨だもん、まっすぐ帰んでしょ

ハナ どうですか。まあしばらく待つて戻らない様でしたら、またになすつて下さい

関口 はい

など言いつつ、ハナ、家に入り、台所へ。湯呑を一つ持って来て関口に。

ハナ お茶も出さなすすみませんね

ウメ これ、お茶じゃないだろ

ハナ (また台所へ)飲む人がいないと、お茶っぱなんてどうぞ買わないから。今あるのはソレか水

ウメ アンタもいい加減お水にしときなよ。大事な体なんだから。お腹に子がいるんですよ

関口 あら

ハナ、自分の湯呑と酒瓶を持って台所から戻ってくる。

関口 奥さま、「懐妊おめでと」でございます

ハナ めでたいんだかね。どうもありがとございます

長吉たちが帰ってくる。長吉とタキは揉めている。ハナはチンドン太鼓や旗を片づけるのを手伝う。

誠治郎 おかみさん、帰りましたよろっと。(ウメに気づきまたお前

タキ だからって何で半分になっちまうんだい

長吉 やった時間が半分なんだ。言ったってしょうがねえだろ

ハナ またかい？

長吉 ああ。ケチな「と言いやがって。しかし、「雨続きじゃな

誠治郎 チンドン殺すにや刃物はいらぬ。雨の十日も降ればいい、だねえ

タキ とにかく困るよ。「うちはいつも通り考えて、やりくりして

長吉 いつも通り考えねえでくれよ。「こういう商売なんだ。梅雨時はしょうがねんだよ

タキ 知らないよ、そんなこと。アタシは何も聞いてない

長吉 聞いてねえ聞いてねえってうるせえな。んなーから百まで説明してらわっかい。おい、やるか

誠治郎 ほい来た

ボロ座布団に花札を置き、誠治郎と対戦準備する長吉。と、ウメが誠治郎に抱き付いてアチコチまさぐり出す。誠治郎「おい、やめろっやめろ」ラッ」と抵抗するが離れない。長吉、台所へ。

長吉の声 (笑)そっすいっことあウチ帰ってからやれよ

タキ まだ話は終わってないんだけどねえ

長吉の声 分かった分かった、次から色々考えっから、今日はこのぐらいいにしとけよ

長吉、湯呑を二つ持って来てタキへ注いでやる。

長吉 ほれ、飲みな

長吉、自分にも注いで飲み始める。誠治郎とウメは相変わらず攻防中。

関口 あの…

ハナ あんた、お客さんだよ

長吉 うん。目には入っちゃあいたが

関口 お久しぶりでございます

長吉 どうも、お久しぶりでございます

ハナ 清に用があるから待ちたいってさ

長吉 あいすいませんね。アイツは仕事で

関口 ええ、そう伺ったんですけど。何時頃終わるんでしょうか？お仕事は

長吉 さあ、給仕をしましてね、昼時だから今が一番忙しいでしょう。今日は遅出か？

ハナ いや、朝出てったよ

長吉 じゃあ夕方ぐれえに戻るかな。卒業してもまだ何かあるんですかい

関口 ええ、ちよつとご相談が

ウメ あった！！(財布を掴んでいる)

誠治郎 オマ、返せこの野郎！

ウメと誠治郎が追いかけてこ。関口以外は驚かず上手く避ける。右往左往する関口を挟んで

ウメ 金、今日という今日は入れてもらおうからね

誠治郎 入れてるだろ、いつも



ウメ 嘘ばかり。いつも博打でスツちまうじゃないか。親方、今日は勘弁してくださいよ

長吉 何だ、俺が悪者か？

誠治郎 とんでもねえ

ウメ あんた弱いんだから。何べんやったって勝てやしないんだから

誠治郎 全部スルまでやんねえよ

ウメ やるよ、やってるじゃないか

誠治郎 う、うるせえっ、てめえで稼いだ金、好きに使って何が悪い。返せ」のっ

追いかけて再開。ウメが外へ出ようとする、帰って来た清に阻まれ、誠治郎に捕まるウメ。

清 びっくりした。…ただいま

ウメ (誠治郎に財布を取られ) ちきしょう…

関口 清くん、こんにちは

清 先生

長吉 おい、早いじゃねえか

清 お久しぶりです。どうしたんですか？

長吉 おい清っ

ウメ 自分の稼いだ金って言うけどね。アタシだって朝から晩まで内職して、時々泣き屋までやっつて足しにしてんだ。自分の為には一銭だって使っちゃない。だから何とかやってけんじゃないか。そっだらっ

誠治郎 ……

ウメ そっだらっ、キヨちゃんっ

清 ちょっとよく分からない

ウメ そっだらっ、ハナさんっ

ハナ 知らねえよ

ウメ アタシの味方はいないのかいっ(泣く)

誠治郎 おい、人んちでメソメソすんじゃねえよ。…行くぞ。親方すまねえ。今日は

ウメ 聞いて下さいよ。この人ね、いつも「うやうやう」「泣くんじゃねえ」「もう言うな」ってそればかり。先のことなんて何も考えてない。アタシはいつも先の事考えて、方々へ相談してるんです。それでいい方法を教えてもらってはこの人に相談して。それなのにあれが嫌だ「これが嫌だ」って全部断って。こないだも江藤さんからいいお話を頂いたんですよ。なのに、百姓は嫌だの寒いだの

長吉 百姓？

誠治郎 いいよその話は

清が外へ行こうと関口を促す。

ウメ ホントにいいお話だね、大陸へ渡ってお百姓をするんですよ。土地を頂いて、自分の家を建てて、地主になれるんですって

ハナ ほお、

ウメ 去年から行ってる人たちは、みんな上手くやってるぞうだね

誠治郎 無理だよ。俺は百姓したことねえんだから

ウメ 大丈夫だって言ってるじゃないか。行く前に勉強会もあるし、向うに世話役の会社もあるんだから

関口 私の知り合いにも、大陸へ渡った方がいますわ

ウメ そうなんですか？

関口 ええ、でも、しばらくして帰って来たんです。行くのはおやめになった方がいと思いますわ

ウメ え…

関口 あれはドロボーと同じです

ウメ ドロボー…

関口 誰でも地主になれるなんて、そんなに上手く行くはずないでしょう？土地を一から耕すのは容易なことではありませんわ。きっと誰かが耕した物を取り上げているんです。そんな事に加担すべきではありませんわ

沈黙。

ウメ まさか…江藤さんがそんな悪いことを勧めるはずはないですよ。あの方は本当にいい人で

関口 その方も分かってらっしゃらないんだと思いますわ

ウメ いいえ。江藤さんは何でもよく知ってますよ。立派な方なんです。元は軍人でね、その中でも偉い方だったんですって。それなのに少しも偉ぶらなくて、私たちに優しいんです。あの方が大家になつてから、長屋の揉め事もすぐ解決してくれるし、チンドンの仕事まで世話してくれて、ねえ親方

誠治郎 いやもう、こいつが夢みてえな事言ってるだけで、行く気なんかありませんから。ウメっ

ウメに「ゴロスを持たせ、自分の荷物をまとめてウメを促しつつ去る誠治郎。

関口を外へ連れ出そうとする清。

長吉 どこ行くんだ

清 え？

長吉 仕事は？早上がりしたのか？

清 …辞めて来た

長吉 あ？

ハナ またかい

関口 どうしたの？

清 変な客がいて、僕が釣り銭ちよろまかしたなんて言っんですよ。それで、胸を突いて来るもんだから「いい加減にしろ」って押し返したんです。したら店長に言いつけやがって。釣り銭なんてごまかしてない。向うから因縁つけてきたんだって言っても、店長のヤツ、謝れ謝れって言っばっかりで

長吉 謝ってしろ

清 は？

長吉 店長さんに謝って、もう一度雇ってもらえ

清 嫌だよ、そんなこと

長吉 じゃあどうするんだ。明日っからどうする

清 探すよ仕事。すぐ見つかるよ

長吉 嘘つけ。前んどこ辞めた後もずっとブラブラしてたじゃねえか。不景気なんだ。そうすぐに見つからねえよ。謝って来い

清 嫌だね

長吉 そうか。じゃあ明日っからウチの仕事手伝えっ！

清 だからやらねえよ、チンドン屋なんて

長吉、清の胸倉を掴み、家の中へ投げ倒す。悲鳴を上げる関口。タキは飲みながら安全な場所へ移動。

長吉 チンドン屋なんてって何だー！いちゃんも俺も一生懸命やって、商店街の皆さんに頼りにされてやって来たんだ！お前のおかげで食ってきたんだろっ！

清 自分が一生懸命だからって子供に押し付けるなよー大体、チンドン屋なんていつ無くなるか分からねえじゃねーかっ

長吉 何だこっ

清 広告はもう新聞やラジオの時代だよ。アドバルーンやネオンもある。もっと簡単に電柱広告にでも任せりゃいいんだ。こんな時代にチンドンチンドン宣伝するなんてナンセンスだよ

長吉 フン、横文字使やいいと思って。電柱広告に任せろだっ上等じゃねえか。電柱は電気運んで世の中明るくする。けどな、俺らは笑顔運んで世の中明るくしてんだよ。おまけに電柱みてえに突っ立ってるだけじゃねえ。こっちから足運んで、口上でもって歌でもってお披露目して、財布の紐まで緩ませて、世の中回す柱なんだ！

清 大きく出たね

長吉 何っ

清 世の中回してんのは、その雇い主。資本家だろ？

長吉 う、うるせえ。とにかくな、顔も見えねえ味もしゃしゃらもねえ広告とは格が違うんだよ

清 話にならないよ。とにかく俺はチンドン屋には向かないんだ

長吉 向かないことがあるか、チンドン屋の息子はチンドン屋なんだ！

関口 それは一方的過ぎますわ、辰野さん

長吉 あん？

関口 お仕事に誇りを持っておられるのは素晴らしい事です。でも人には個性という物があります。清くんが他にやりたい事があるのなら尊重すべきです

長吉 なんだアンタ、三年前の復讐かい？

関口 そんなじゃありません。今思ったことを率直に申し上げただけです

長吉 前にも言いましたがね、ウチにはウチのやり方ってのがあるんですよ。個性だ何だって…あろうがなからうが、子供なんだから親の言うこと聞いてりゃいいんだよ！

関口 何て封建的な。日本は古い仕来りに縛られて若い芽を摘んでしまっから成長しないのです

長吉 な…

関口 それぞれの家庭のやり方や「事情はあるでしょう。でも、子供たちが自由に学び、興味を持った事を出来る限り伸ばしてやれば、沢山の才能が開花します。その新しい才能こそが、この貧しい社会を改善してくれます。私、その為ならどんなことでもいたしますわ

清 先生…

関口 辰野さん、日本の未来はこの子たちにかかっています。目先の事ばかり考えて、子供を押さえつけてはいけませんわ

長吉 ニッポンの未来なんてどうだっていいよ。俺は、辰の家の未来を心配してんだ！

関口 辰野さん！

長吉 勉強ができねえだの、やりたいことやれねえだの、俺たちも一緒だったよ。それでもやれる事を必至にやっつてこいまで来たんだ。でも、こいつは屁理屈こねてすぐ逃げ出す。それが気に食わねんだ

清 仕事はすぐに見つけるよ

長吉 だから、ウチを手伝えって言うてんだよ

清 だから向かないって言うてるだろう

長吉 じゃあ何が向くんだ？何ができる？

清 ……

長吉 あのねえ先生、こいつはただ意地を張ってるだけなんです。俺らにブラブラしてると「見せつけて、甘えてるだけなんですよ。どうせお前は師範学校にも受かりやしなかったよ

清 何だよ。受けさせもしなかったくせに

長吉 厭味ったらしい

関口 清くんは充分合格する力があつたと思いますわ。進学できなかったのは残念です。でも、清くん、勉強は学校以外でも続けられるわ。私ね、卒業して働いている子たちと一緒に、文集を作りたいの。清くんにも参加してもらえないかしら

長吉 何だよいきなり

関口 すいません。この話をしようと思つて来たんです。あなたと同じ学年だった里見くんや柴田さん、松岡さんも参加してくれるのよ。下の学年からは山本くんや小山内さん。桜井先生も賛同して下さつてるわ。みんなで、詩や小説。読んだ本の感想文。何でもいいから思つた事、知つて欲しいことを書きましよう。それと、良ければ挿絵を描いて欲しいの。清くん絵が上手いもの

清 えっ…

長吉 お断りします。こいつにそんな時間はありません。そんな事してる暇があつたらウチの仕事を

清 やります！

長吉 おい…

関口 ホントにっありがたう…

長吉 いい加減にしろ…もうあんた帰ってくれ！

長吉が関口を押ししたはずみで框から土間へ足をつく関口。ちやうど男が入って来た。うずくまる関口。

関口 ……あ、いたたた

男 おいつ、大丈夫かい？

清 大丈夫ですか先生？

ハナ 寅雄

寅雄 あぶねえじやねえか兄さん。(関口を起こしつ) ケガはねえかい

関口 すいません。…あいたつ

片足で飛び跳ねて框に座り直す関口。足首をさすっている。

寅雄 くじいたのか

関口 そうみたいです

清 すいません。親父っ

関口 ううん、平気よ

長吉、口の中で謝ったのか謝っていないのか。元の場所へおさまり

長吉 ハナ

ハナ、手ぬぐいを濡らしに行こうとすると、清が素早くそれに代わる。

タキ 寅雄さん、ごうも

寅雄 ……りやごうも、おタキさん。…その、兄さん、お取り込み中にすいませんがねえ

ハナ 取り込み中だよ、帰んな

寅雄 何だよ、話してる最中に

長吉 何か用かい？

寅雄 ちよつと相談で

ハナ 帰んなって

寅雄 うるせえな。あ、あの、兄さん

清が濡れた手ぬぐいを持って来て、関口の足を冷やしてやる。

清 俺は先生と一緒に文集を作るからね

長吉 ダメだ。そんな暇があつたら

清 仕事は見つけるよ。ちゃんと金を入れる。その上で文集も作るんだ。文句ねえだろっ

長吉 …勝手にしろもう

関口 ありがとうございます

寅雄 あの、兄さん

清 先生、よろしくお願いします。

関口 こちらこそ

寅雄 えつとおー…あんた先生なのか？

関口 はい、第一高等小学校の関口です。清くんの元担任で

寅雄 へえー

外からの声 兄貴、まだかい？

寅雄 ああ、ちよつと待て

外からの声 おい逃げるなつて！

寅雄 えつ、源太？！

寅雄、外へ。何かと格闘している様子。

ハナ 何だ？牛か馬でも連れてきたのかい？



寅雄が、若い娘を押し入って来る。娘の髪は濡れてボサボサ。服はさほどでもないが、顔も腕も汚れている。後から入って来た弟分の源太がアコーディオンを担いでいる。

ハナ 何だいその子は

寅雄 タカマチで勝手に商売して、親分に捕まったんだ

ハナ 商売？

寅雄 いや、そういうんじゃないよ

源太 これ(アコーディオン)で、流しやってたんだよ

寅雄 ホレ、上りな

ハナ ちょっと

寅雄、源太、娘を連れて長吉の前へ。源太は背負っていたアコーディオンを降ろす。娘、一旦長吉の前に座るものの、顔を見て逃げ出そうとする。寅雄が止めて。

寅雄 大丈夫だ。取って喰いやしねえよ。兄さん、ホントにすまねえけど、この子置いてやってくんねえか

長吉 は？

ハナ あんた何言ってるんだい

寅雄 盃をもらわずに商売なんかしたらホントは何されても文句言えねえんだ。みんな、見世物小屋か銘酒屋にでも売っちまえなんて騒いでさ。でも、この子は何も知らずにやったことで。聞けば身寄りもないらしいし、可哀想だな。もう二度とこんなことなせねえからって頼み込んで連れてきたんだよ

ハナ それで何でウチへ来んだい

寅雄 だって、楽器が出来んだから商売の助けになるじゃねえか、なあ

源太 うん。俺、ついポーッと聴いちゃったぐらい上手かったぜ

寅雄 ポーッとすんな

長吉 んな、どこの馬の骨とも分からねえヤツ置けるかよ。警察連れてけ

ハナ そうだよ

源太 警察に行くこうとするとめっちゃくちゃ暴れんだよ。もう手におえなくてさ

ハナ どうせ盗みでも働いて逃げてんだろ

娘、首を振る。

寅雄 こないだまで浅草にサーカスが居てよ、俺、そこで観た気もすんだけどなあ

娘、黙っている。

ハナ とにかく居候を置く余裕はないよ。お前が引き取ったんだからお前と一緒に暮らしな

寅雄 そういう訳に行かねえよ。一応俺も男だし……なあ

長吉 こっちも長雨で仕事にならねえんだ。大きな仕事でもない限り人手はいらねえよ

大家の江藤が入って来る。

江藤 ごめんください。(服についた雨を拭きつつ)いやあ良く降りますね

長吉、ハナ、タキ、寅雄、急に姿勢を改めて江藤を迎える。源太もそれに飲まれて正座。清も一応。

ハナ 江藤さん、いらっしやいます

長吉 どうも、いつもお世話になっております

江藤 いや、こちからこそ。今日はまた大勢お集まりですな

長吉 はあ。むさくるしい者ばかりで、申し訳ありません

江藤 今日はもつお仕事は

長吉 ええ、この雨で。最近はもう困り果てております

江藤 なるほど。思うに任せませんなあ。それでね、辰の家さん、是非お願いしたいという方があるんです

長吉 いつもありがとうございます

江藤 いやいや

長吉 商店街のお仕事ですか？

江藤 いえ、会社さんの方でね、そろそろ入用なアレ。ハ工取りの宣伝をしてくれないかというんですよ。去年もお願いしなかったかな？

長吉 あー、やりました。あの、リボンハ工取り紙でございますね？

江藤 そうそう。それに加えて今年は新商品が出たそうですよ。天井にぶら下げるんじゃないなくて、離れた所からシユーツとひと吹き。それで殺してしまっらしいです

ハナ まあー、それはすごい

江藤 ええ。ハエが出たらシヤツとね。紙を用意しないでいいんですから。便利な物を開発したもんですよ

長吉 そうですねえ

江藤 大陸へ進出して、ハ工取り会社もかなり繁盛しているらしい。喜ばしい限りです

長吉 ええ。それで、寺島ストアかなんかでやるんですかい

江藤 いや、そうではなくて

長吉 じゃあ、居つきはなしで？街廻りだけですか？雨が降ると、充分廻れるかどうか

江藤 今回は新商品が出たんんでね、随分大規模にやるらしいです。駅前に特売所を設けて、その隣に屋根のある宣伝場も作ってくれるそうですから。雨だったらそこでやればいい。晴れたら町も廻って欲しいとのことで。来週から半月ほどお願いしたいそうです。いかがです？

長吉 やります。是非やらせて頂きます

江藤 良かった。では先方に伝えましょう。それとね、なるべく賑やかにやって欲しいそうですよ。少なくとも五人は頼みたいそうですが、大丈夫ですか？

間

長吉 はいー！

江藤 ならば結構です。詳しいことはまたお伝えしますから(出て行く)とすが ……おや、あなた

先日お会いしましたかな？

関口 はい。第一高等小学校で。関口と申します

江藤 ああ、そうでした。これは失礼。校長先生によりしくお伝えください

関口、頭を下げる。江藤は去った。恭しく頭を下げて送り出す一同。

ハナ どうすんだい？おタキさんと誠治郎とアンタと

長吉 お前、名前何てんだ

娘 ……あかね

長吉 そうか。何か弾いてみる

寅雄 おお、そっだそっだっ

源太がアコーデオンを渡すと、茜が演奏し始めたのは「サーカスの唄」。

一同、歓声。合わせて歌い出す。それに音楽も重なる中、皆で殺虫剤「キリゼツ」の宣伝場へと転換。ハナが茜の髪や身なりを直してやったり。関口と清は文集作成に向けての固い握手。タキが寅雄に近づくが、ツレナイ寅雄。ひよこひよこ片足で帰ろうとする関口を支える源太だが、その役は寅雄が取って代わり、関口と去る。文句言いつつ追う源太。不満顔で見送るタキは仕方なく三味線の準備。

傘の骨の先にハエ取り紙をぶら下げた物、蠅の羽や触角、殺虫剤らしき手作りの筒を運んで来るウメ。長吉に指示を仰ぎ、清にハエゼットを着せようとする。清は抵抗するが、ウメとハナで無理やり着せて去っていく。「新発売キリゼツ」の旗とゴロスを持った誠治郎が来て、旗は清に。皆で千鳥を演奏する。

長吉 はいーおやかまじゅうございますーこの度、皆様にご紹介いたしますのはこの加茂山工業の

「キリゼツ」。この季節、ブンブン飛び回るいやーな蠅。百害あって一利なし。一匹おれば何千何万のバイキンを振りまくという厄介物。この蠅を一毛打尽に退治してくれますのが「激烈滅止」の「キリゼツ」でございます。さてハエ取りと言えは、皆さま良く「存じ」のリボンハエ取り紙

誠治郎が傘を開く。ゴラゴラとハエ取り紙がぶら下がっている。

長吉 この様に「家庭のお便所やお店の軒先に沢山ぶら下がっている。これももちろんお勧め定番。

効果絶大。しかし、このハエ取り紙、ちょっと困った事がある。（傘を受け取り誠治郎の前へかざす）

誠治郎 さ、今日の晩御飯は何にしようかしら。ちよいと、ちよいと魚屋さん、その「ワメを下さいな。

ちよいと、ちよいと魚やさあん（店の中へ進もうとする仕草。と、ハエ取り紙が顔にくっついた）はあーっ！いやだ、いやだよお。ペタ。ペタ。ペタっ、あたしゃこんな顔でもハエじゃない。人間様だよ。

あはっ、取れない、取れないっ……

長吉　なんて恥ずかしい思いをされた方もいらっしゃるでしょう。しかし、「この新発売」キリゼツ」ならば心配ご無用！何故ならば

清　（蠅のように飛び）プウーン、プウーン

茜　プシューッ……（作り物の殺虫剤の筒でハエを退治）

清　うわあーっ！や・ら・れ・たあーっ！（キリキリ舞って倒れる）

長吉　と、この様に、蠅から離れてシャツとひと吹き。即座に退治してくれるのであります。

安心安全。効果絶大。売れ行き好調につき、新発売にして売り切れの可能性も有りや無しや。お隣の即売所で販売しております。

長吉　お早く、お早く

長吉・誠治郎　お買い求めくださいませ……

傘は清が受け取り、長吉のチンドン太鼓から「アラビヤの唄」の演奏。街を一回りして休憩となる。

長吉　「くろっさん

一同楽器を置いてひと休み。清、タキは大きな溜息。清はハエセットを乱雑に脱ぐ。

長吉　大事に扱えっ。ウメが一生懸命作ってくれたんだぞっ

誠治郎　偉かったよ、キヨちゃん。偉かったし、ちゃんと蠅に見えた。ウケてたよ

清　嬉しかねえよ

誠治郎　そっ言わないで。

長吉　あんなんじゃないやダメだ。恥じらいながらやるんじゃないやねえ……

誠治郎　まあまあ、手伝ってくれるだけいいじゃないの。親方、あれでも嬉しいんだよ

長吉　嬉しかねえや

清　今回だけだからね

長吉 この野郎

誠治郎 (長吉を止め)それにしても茜ちゃんはいいねっ。笑顔がいいよ。

茜 ありがとうございます

誠治郎 可愛いし、間合いも外さないし。いい子を見つけたよホントに

長吉 ああ

誠治郎 そうだ。秋に女子宣伝広告養成所つてのが出来て、鶴家鶴松つてのが教えるんだよ。そこ行けばさ

長吉 学校で勉強するようなもんじゃねえよ。見て聞いて盗めばいいんだ

誠治郎 …そうだね。茜ちゃんならそれで充分だ

タキが特大の溜息。

長吉 アンタさつきから何だ。辛気臭い顔して

タキ 生まれつき「うう」顔なんです

長吉 それと、途中で弾くのやめんじゃねえよ

タキ 弾いてますよ。三味線は音が小さいから聞こえないんです

長吉 いや、弾いてない時もあった

タキ だって、その子が知らない曲ばかりやるから

茜 「めんなれっ

長吉 いいんだいいんだ。知らない曲つて、全部流行りの唄じゃねえか。覚えよつって気はねえのかい

タキ そんなジャズみたいな曲、三味線じゃできませんよ

茜 すいません

タキ 全く、新入りのくせに。なんの相談もなくトンドンやられちゃたまったもんじゃないよ

茜 ……ごめんなさい

清 茜ちゃん、あつちで休もう

清、アコーディオンを持ってやり、少し離れたところへ茜を連れて行く。

長吉 よせよ、あんな可哀想な子に。キツク当たることねえだろう

タキ どの馬の骨とも分からないなんて言いたくせに…親方、ちょっと前借りさせてもらえませんか

誠治郎 この流れで?!

タキ どうしても入用なことがあって、なるべく急いでるんですよ。取りあえず十五円ばかり

長吉・誠治郎 十五円っ?

長吉 そんなもん、払える訳ねえだろう

タキ 大きな仕事なんだ。大したことないだろう?心配しなくてもトングズラしやしないよ

長吉 ……無理だよ。そんなまとまった金、今はねえよ

タキ、また大きく溜息。清がヨーヨーで暇つぶししていると、茜がアコーディオンで「巴里の屋根の下」を弾く。溶暗。音楽。

■その二 七月半ば■

蝉の声と共に明るくなる。長吉の家。関口、寅雄、源太がいる。関口と寅雄は一冊の文集を一緒に読んでいる。源太は框に紙を広げて勉強を教わっていた様だが、今は土間に並べた靴や鞆の細工に熱中。

関口 まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり  
やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは 薄紅の秋の実に 人こひ初めしはじめなり

寅雄 いいね。えー、わがころろなきためいきの。その髪の毛にかゝるとき、たのしき恋の盃を、君がジヨウ

関口 なさげに酌みしかな

寅雄 ふーん。心なき溜息って何だい?

関口 意識しないで自然に溜息が漏れたという意味よ。きっと好きな人を前に胸が高鳴って、思わず息が漏れてしまったんでしょね。それが恋人の髪にかかって揺れたんだわ

寅雄 えー、そりゃ近すぎやしねえか。接吻でもしてたのかね

関口 (笑)林檎畑の樹の下に おのづからなる細道は 誰が踏みそめしかたみぞと

寅雄 踏みそめしかたみぞ

関口 二人が同じ林檎の樹の下に通ううちに、自然に小道ができたって事だわ。それを相手の女性が、どうしてこんな所に道ができたのかしら？って聞くのね。何故だか分かってるのに

寅雄 ははあ、手玉にとろうとしてやんな。手こわい女だぜ

関口 可愛らしいじゃない。前髪を上げ始めたばかりだなんて。まだ子供だわ

寅雄 子供だって、女はあなどれねえよ

関口 もう(笑)。良ければこも読んであげて。小山内さんという子が感想文を書いたの

寅雄 うん。しかし、いい詩だね。何だろ、調子がいいよ

関口 そうね。これは七五調で書かれてるから。(指を折りつつ) まだあげそめし まえがみの

寅雄 ああ、それなら俺も知ってる。牡丹に唐獅子竹に虎、虎を踏まいて和唐内、内藤様は下がり藤。  
最初だけ字余りだ

関口 面白いわねえ

寅雄 そうかい？面白いっつたらこの名前が面白いよ。シマザキフジムラなんて、苗字二つつ並べてさ

関口 (笑)確かに苗字が並んでるみたいね。でも、シマザキトウソンと読むのよ

寅雄 へえー

清が廁から戻って来る。少々機嫌が悪い様子。小机に座って絵を描く。

関口 清くんの絵、本当に素敵だわ。みんなそう言ってる

清 すいません。どうしても文章が書けなくて



関口 好きなことを載せればいいのよ。絵だって素晴らしい自己表現だわ

寅雄 (文集を手にし「いいじゃねえか。お前の名前書いてあるぞ。これ、本屋にも置くのかい?)

関口 いいえ。それは、同人誌だから。勉強会を兼ねたような物よ

寅雄 ふーん。(表紙を見て「これ、シジミでいいの?)

関口 そう。「志人の樹」

寅雄 字、間違ってるぞ。シジミってこの、島崎先生みたいな人の事だろ?

関口 わざとその字にしてあるの。志を持つ人の樹。各々が志を持ち寄って、揺るぎないどっしりとした樹となるう。時流に流されず、自分の考えを持った一本の柱であらう。という意味で

寅雄 へえー、何かカッコいいな

関口 そう?

寅雄 うん。おい源太、仕事はいいからちゃんと勉強しろよ。すいませんね、コイツの為に

清 全くだよ。何で寅雄さんや源太さんが勉強会する事になるんだよ。わざわざ先生に来てもらって。先生は暇じゃないんだぜ

関口 いいのよ。もうすぐ夏休みだし、勉強したい人がいれば協力するわ。大人も歓迎よ

寅雄 ほらみる、独り占めすんなよ

清 何だよそれ

源太 (課題の紙を持ってきてとつくに出来たよ。簡単だ

寅雄 ホントか?こいつ仮名はできるけど漢字がダメなんですよ

源太 分かるよ漢字ぐらい

寅雄 嘘つけ、とんでもねえ間違えするじゃねえか

関口 見せて頂くわね

源太 へーい

源太、また靴の作業に戻る。

清 何だいそれ？

源太 バイのネタ

清 それ売るの？

源太 そうだよ。今、売り物にしてっつと」

清 これ、左しかないじゃない

源太 こっちの右のと同じ大きさだろ？（履いてみる）悪くねえ。で、左右比べて、同じ様な見栄えにする

清 いいのかいそれ？まさか盗んで来たんじゃないだろうね

寅雄 バカ野郎！盗品なんか売るかよ。ちゃんと仕入れたんだ

関口 源太さん、どうぞ

源太 へい

源太、関口から添削した紙を受け取る。

源太 え、嘘だろ。どこが間違ってたよ

関口 （笑）ちょっと意地悪な問題だったかもしれないわ。これはね、読み方は同じだけど意味が違う漢字の問題なの。「太郎はその夜、マンテンの星を見た」の満天は満月の「満」に、天上の「天」。  
源太さんが書いたのは試験で「満点を取る」の点ね

源太 かあーやられたあ

関口 それとこの、「友達をだますとは、ヒジョウな男だ」の「ヒジョウ」は「こっちの字が正解。

関口が添削した字を示す。寅雄も覗き込む。

源太 へえ……

寅雄 源太のは尋常小学校のジヨウだな

関口 そう。でもこの文脈で当てはまるのは「なさけ」。感情の「情」よ

源太 やや「しいなあ

関口 やや「しいのよ日本語は。西洋に比べると音が少ないから、同じ音の名前が沢山できてしまうのね。ほら、「ハシ」といえば？」

源太 ……飯を食う時の「箸」

関口 そう。「ハシ」(アクセントが違う)だったら？」

寅雄 白鬚橋の「橋」

関口 そう。「こうして口に出して言えば分かるけど、仮名でハシと書いただけでは分からないわ。でも、漢字で書くのと違いが分かる。漢字にはそれ自体に意味があるから、何の事が想像しやすい。「満天の星」なら天を満たす沢山の星。人をだます「非情な男」は情けがあらずと書いて非情

源太 ホントだ。面白いね

関口 そうでしょ？名前もそうよ。漢字が違えば全然意味が違う。「両親が託した願いが違って来る。寅雄さんは

寅雄 寅年生まれだから

関口 そうね、それもあるかもしれないけど。トラに雄大の雄で、トラの様に雄々しく逞しい人になってくれという事かしら

源太 じゃあその通りだ。なってるぜ、兄貴っ

寅雄 よせよ

源太 俺は？

関口 源太さんは、源に太いでしょ？源は水の流れや物事の始まりという意味ね。それが太いって事は

寅雄 始まりから太いって、何かイヤらしくねえか

源太 やめてくれよ

関口 源は全てを生み出す力。色々な物を生み出す太い力という意味だと思っわ

源太 良かったあ

清 じゃあ。ピッタリだ。右と左で違う靴を対にしちまうんだから

寅雄 ああ。こいつが居るとネタに困らねえ

源太 へへ、ほめ過ぎだよ

寅雄 清はあれだな。字の通り

清 清く正しくけがれなくかい？名前負けだよ

関口 そんな事ないわよ。ぴったりよ

寅雄 先生は？

関口 私は啓子。拝啓の啓に子供の子

源太 あれか、書割のことだ。芝居で役者の後ろに立ってる松の木やら富士山

関口 (笑)そっちの「背景」じゃないのよ。手紙の最初に書く「拝啓」の「啓」さっきのハシと一緒に

寅雄 (源太の頭をはたき) そうだよ。手紙のケイだよ。で、どんな字だい？

関口 (紙に「啓子」と書き「ニ」っていう字。人の目をひらいて物事を分からせる。間を明るくする。口を開き、意見を申し述べる。という意味

源太 へえ

寅雄 ピッタリだな

関口 (笑)ありがとう。私、子供の頃、口から生まれた啓子さんと呼ばれていたの。  
名は体を表すとは良く言ったものだわ

源太 漢字って面白えな

ハナと茜が買い物から帰って来る。

関口 あ、お邪魔しております

ハナ あらどうも

茜 こんにちは

清 (茜にお帰り)

寅雄 お帰り！

ハナ お帰りじゃないよ。いつからウチの人間になったんだい

寅雄 るせえな。顔見りや嫌味ばっかし

ハナ 茜、ダイドコへ仕舞ったら洗濯もん入れてくれるかい？

茜 はい(台所の方へ去る)

ハナ あああ、暑い暑い

寅雄 へっ、親子みてえだな

ハナ ああ、助かるよ。ニコニコとニツワリで調子が悪いんでね

関口 大丈夫ですか？

ハナ ええ、あの子が手伝ってくれるんで。やっぱり女の子は違うね。寅雄、あんた自分ちでやりなよ

寅雄 え…俺んちは人様に来てもらえるとこじゃねえよ。コイツんとこもおんなじだ

関口 すいません。私の下宿でやればいいんですけど、男の方は入れなくて

寅雄 いいじゃねえかよ。清だって先生とやり取りがあんだろ。これ(文集)作んのによ

ハナ ややこしい事は嫌なんだよ。あの人も、丸きり賛成してる訳じゃないんだから

関口 すみません

寅雄 そうガミガミ言うなよ。兄さんが帰る前に行くよ。それよりさ、啓子先生は大した先生だぜ。俺、学校なんてクソくらえと思ってたけどさ、この人に教わるとホントに面白えよ、勉強が。な

源太 うんっ

寅雄 子どもの頃にこんな先生に会ってたら、もっちとマシな人間になってたかもしんねえな

ハナ 無駄さ。アンタは何やったってバカだよ

寅雄 おい

茜が裏から洗濯物を取り込んで来て畳み始める。源太はまた靴の作業に戻っていた。

ハナ ああ、ありがと

寅雄 あれ？…茜がいるってことは、今日は

ハナ 誠治郎とタキさんと三人だよ。そろそろ戻るんじゃないかい

寅雄 そっか。先生、今日はこのぐぐらいで

関口 そう？

寅雄 うん。おい源太

寅雄、源太、並んで正座をし、手をついて関口に頭を下げる。

寅雄・源太 ありがとうございました！

長吉、誠治郎、タキが帰ってくる。

長吉 帰ったぞ

寅雄 うわ…

ハナ お帰り

寅雄、源太、くるりと向きを変えて長吉に手をつき

寅雄・源太 お帰りなさいませ

関口 お邪魔しております

誠治郎 どうも

長吉 何だ。また勝手に寺子屋か

寅雄 もう終わるところで

関口 長居してすみませんでした。失礼いたします

長吉 清、仕事、見つけて来たのか？

清 今日はまだ……見つかってないよ

長吉 (文集を拾い) こんな暇つぶししやがって。金入れたら文句ねえだろって言ったな

ハナ 調子が悪いんだ。頼むから喧嘩しないでくれよ

関口 辰野さん、清君、とてもいい絵を描いてくれました。お時間あったら見てあげてください

一礼して去る関口。

寅雄 先生、送るよ

外へ出て行くこととする寅雄だが、タキが邪魔して草履が取れず。

タキ 親方、今日の分、頂けますかい

長吉 え？…ああ(誠治郎にあまり見えない様に払う)

タキ どうも。それじゃ、また宜しく願います。寅雄さん、ちょっと相談があるんだけどいいかい？

寅雄 ん、ああ、いいですよ

タキ、寅雄を引っ張って二人で出て行く。源太はもたもた荷物をまとめている。

長吉 いけ好かねえ女だなあ……。飯は？

ハナ はいはい。これからやるんじやないか。アレ？

長吉 あれ？珍しくいねえしやねえか。ウメは？

誠治郎 今日は泣き屋で、吉野町に

長吉 へえ。誰んどこだい

誠治郎 良く知らねえが、大店のじじいだって言ってたかな？

長吉 ふーん。(固まっているハナにおい、何やってんだよ)

ハナ 茜っ

茜 え？

ハナ 鯛、お前持って帰ったかい？

茜 いえ。あれはハナさんが

ハナ はあー、忘れたっ…

長吉 なに寝ボケてんだ馬鹿っ

ハナ 魚屋に置いたまま帰っちゃまったんだ。置いといてくれりゃあいいけど

茜 取りに行つて来ます！(買い物かごを手に出て行く)

ハナ すまないねえ…ああ、参った参った

誠治郎 茜ちゃん、来てひと月ぐらいかい？まるで母と娘だね

長吉 あんな子ならな。家の手伝いもするし、仕事も喜んでやるし。どうかのドラ息子とは大違いだ

清 うるせえな

源太 じゃ、失礼しやす

長吉 まだいたのかよ

源太 また来やす

長吉 来なくていいよ



源太が出て行くこうとすると、雷鳴。誠治郎、外の様子を見に戸口まで行き

誠治郎 これは一雨来るぞ。茜ちゃん、傘持ってたかな

長吉 そこに何本ある？

誠治郎 四本だ

長吉 じゃあ持ってねえな

清 俺、持って行くよ

清、戸口で傘を取って出て行く。

源太 お借りしやす（と傘を二本取って外へ）

誠治郎 何で二本持ってくんだ

源太の声 先生が濡れるといけねえんで。じゃあ

長吉 おいーそんな、貸さなくていいー！

誠治郎（笑）洒落かい？親方！

長吉 何なんだアイツは。全く、寅雄といいあの子分といい、コイツの身内は

ハナ 源太は身内じゃねえよつ。何だい、知ってて一緒になつたくせに（台所へ去る）

長吉 けつ。おい、やるか

誠治郎 ほい来た

花札を始める二人。再び雷の音。

誠治郎 しかしあれだね。キヨちゃんは茜に惚れてんじゃねえか？

長吉 ん？んー…

誠治郎 いっそのごと、茜をキヨちゃんの嫁にして、茜から看板継げって説得させたらどうだい。

あの子は辰の家の華になるよ。その子が「夫婦で仲良くやりますよ」って言えばな

長吉 そう簡単には行かねえよ

誠治郎 行く行くー

長吉 行かねえ行かねえ

誠治郎 行く行くー

長吉 俺から行くぞ

誠治郎 へーい

雨が降り出す。札をめくっている内に暗くなり、神社にぼんやり灯籠の明かり。寅雄とタキが雨宿り。

タキ ウチまで目と鼻の先なのに、こんなところで雨宿りすることないだろう

寅雄 濡れるのはやだよ。風邪引いちゃうだろ。何だよ話つて

タキ 何でずっと来てくれないのさ

寅雄 忙しいんだよ

タキ どこが。いい年して女先生と学校「ここなんかしてやがって

寅雄 あれは源太にいいと思ってやってんだよ

タキ へっ、ぶっかねえ

寅雄 一日から三十日(みそか)までぶっかしてで縁日があつてよ、その上、コロコロで旅に行く事もあんだぞ

タキ じゃあ今何でここにいるんだい

寅雄 今…雨ん中仕事しろっつーのかよ。もういいだろ。帰るよ

タキ (寅雄を引き戻し) 風邪ひきたくねえんだろ！

寅雄 …

タキ 店から出してくれたのは有り難いと思ってるよ。でもそれから知らんぷりはないだろ。こっちは一緒になれるもんだと思つて

寅雄 だから、あん時、姉貴たちに迷惑かけちゃったから、そう、やすやすと一緒ににはなれねえよ

タキ 借金も返したって言ったじゃないか

寅雄 返したよ。立て替えてもらった分は全部

タキ じゃあ

寅雄 借金のことだけじゃねえよ。そのせいで、清が学校行けなかったなんて言われたらよお。

頼むから、ほとほり冷めるまで待ってくれよ

タキ いつ冷めんのさ

寅雄 ……お前が悪いんだぞ。勝手に兄貴の手伝いしやがって。今更、「実は」なんて。ややこしいだろう

タキ あんたが急にいなくなるからじゃないか。姉さんのとこに行ってるのかと思って、必至で探して

寅雄 長い旅があつたんだよ。必至で稼いでたんだよこっちは

タキ じゃあ一言そう言ってお行きよ。一年も帰らなきやこっちは……一言足りないんだよ、いつもいつも

寅雄 悪かったよ

沈黙。

タキ こんな話の最中に何だけどさ、ちよつと、都合してもらえないかね？

寅雄 え？

タキ 田舎から金の無心があつて、どっにかしてやりたいんだ。でも、まとまった金がなくてさ。

米は不作だし、春に地震もあつたろう？他所より酷くはないけどウチも……。

妹にはアタシと同じことして欲しくないんだよ

ややあつて、寅雄、財布ごとタキに渡す。

寅雄 いくらも入ってねえけど使えよ。悪いけど、今はそれしかできねえよ

タキ ありがとう

寅雄 足りない分は、親分とこのボンに頼みやあいい

タキ ……ホントはそのことなんだろう。アンタが一番こだわってるのは、そのことなんだろう？

寅雄 ……

タキ 言ったじゃないか、一回だけなんだよ。それも騙されたようなもんさ。あいつ、アンタがいつ帰るか知ってたんだ、きつと。ねえ、もう随分前のことじゃないか

寅雄 ……そんな簡単な話じゃねえんだよ。もう行く(走り去る)

タキ だって一年も帰らなきゃ！ ……こっちは捨てられたんだと思うじゃないか？

三味線を抱えてタキが去ると辺りは真つ暗。雷鳴。明るくなると、長吉が家の床に清を叩きつけた所。ハナ、茜、江藤もいる。

長吉 あの商店街はな、どの店からも鼻屑にしてもらってた。その中で息子が盗みをするなんて。

お前、何したか分かってんのか！

ハナ ……一体、何を盗ったんだい？キヨちゃん

清 ……

江藤 靴を

ハナ 靴？

江藤 ええ。商店街の入り口のトミヤさんで。赤い靴を。…もしかして、あの子にあげようと思ったんじゃないのかい？随分踵がすり減ってるみたいだから

長吉 ……そうなのか？

清、うなづく。

長吉 (胸倉をつかみ) 半人前のくせに、いつちよ前に色気つきやがって！俺が、俺と親父がどんだけ踏ん張ってやって来たと思っ！頭下げて必死に顔繋いで、一生懸命お得意さん作って、どんだけ頑張ってやって来たと思っ！それをこのバカがっ！

江藤が長吉を引き離そうとする。清、長吉の手を払い

清 せいせいするね

長吉 ああ？

清 ウチん中じゃ、そうやって暴れまくってさ、外じゃあ誰に会ってもヘーコラヘーコラ。イライラすんだよ。いいか？悔しいけど俺のバカ野郎はあんた譲りだ。これであんたの皮も剥かれるよ。いい気味だねー

長吉 この野郎！

長吉、清に馬乗りになって殴ろうとするが、江藤が必死で制する。茜が「ごめんなさい、ごめんなさい」と叫んでいるが、雷鳴も手伝ってその声は聞こえない。江藤が長吉を清から引き離れた。

江藤 もういい、やめなさいっ……落ち着きましよう。「近所の」迷惑になるっ

長吉 (土下座して小さくなり)申し訳「ごめいません

清、外へ走り出て行く。

ハナ キヨちゃんっ！

茜、傘を取り、清を追って出て行く。

江藤 大丈夫ですよ。辰の家さんが真面目なチンドン屋さんだという事は、皆さんよく知ってる。

トミヤさんもそうです。清くんだと分かって「自分が見間違えたかもしれない。早合点したのかも」しれない」と驚いていた。私からも、余り大「こと」にしない様に頼んでおきますよ

長吉 ありがとうございます

江藤 今回のことは、清くんが優しいから「そのこと」だし。まあ、残念な出来事ではありますが……。同じ過ちは、きつとしないでしょう

長吉 この長屋から、盗みをするような人間を出して、江藤さんに本当に申し訳ない……

江藤 辰の家さん、前から提案しようと思っていたんですがね、清くんが勉強したい余りに、ああいう態度を取るのだとしたら、青年訓練所で学ばせるというのはいかがですか？

長吉 え？

江藤 青年訓練所というのは、上の学校へ行けなかった子供たちが、働きながら学び、心身を鍛錬する場です。入学は、一応一六歳までですが、事情があればそれより上の年齢でも構わない。私も軍人会の一員です。清くんの年でも入れる様に、はからえると思います。

来年、第一高等小学校に併設しようという話が出てましてね、ここからなら通い易い。授業料は官費ですから、心配無く。

長吉 はあ…

江藤 修了すれば歩兵連隊に入ることになります。検定試験に合格すれば、在営が半年ほど短くなる。いや、清くんの様な優秀な青年には、士官学校を目指すという道もあるでしょう。

実は私にも、青年訓練所で教えてはどうかと話が来てましてね、明日の朝、第一高等小学校の校長と話をします。乞われれば受けるつもりです。この非常時日本、未来を担う青年たちに、健全な教育を与える。我々の責務だと思っていますから。

長吉 …

江藤 是非、清くんに話してみてください

長吉 はい

江藤 それでは。(去ろうとして、机の上の文集を手に取る) ふーん。関口啓子先生ですな。

先日こちらでお会いました。昨今、教育の現場も非常に難しい局面にありましてね。悩ましい限りです

江藤、文集を置いて会釈すると、傘を持って去る。手をつき、頭を下げて送り出す長吉とハナ。

ハナ …あの人は、清を軍人にしたいのかねえ。…あんだ、何も食べてないじゃないか。簡単なもんでも

長吉 いや、もういい(奥の部屋へ去る)

ハナ、溜息をついて清たちが去った方を見送る中薄暗く。街の一角。街灯の下に清と茜。雨は止んだ。

茜 …「ごめんなさい。…ホントに「ごめんなさい。でも、ワザとじゃないのよ。腕を掴まれた時、暗かったし、雨も降ってたし、良く分からなかったの。キヨちゃんだって知ってたら逃げたりしなかったわ。

ホントにびくりにして、とっさ「。…キヨちゃんが間違われるなんて思わなかったの。…「ごめんなさい

清 もういいわ

茜 何で私がやったって言わないの？

清 そんなことしたら、キミはあのウチに居れなくなるだろう

茜 元々根っこがないんだもん。置いてもらえなきゃ、またどこかに潜り込むわ。見世物小屋でも何でも

清 やめろよ

茜 ……

清 まあ、あんなウチに居るのも、もう嫌だろう

茜 え？

清 親父はあんなで、あの女はキミを女中みたいに使ってた

茜 ハナさんは良い人よ。一緒に買い物に行くと、三べんに一回ぐらい氷小豆おごってくれるわ

清、苦笑する。

清 キミは、サーカスにいたの？

茜、うなづく。

清 あんなウチでも、サーカスよりはいいかい？

茜 サーカスの人たちはみんないい人だったわ。旅は大変だけど、人が嫌で出たんじゃないの

清 じゃあ何で出たの

茜 弟を見たような気がしたから

清 弟？

茜 浅草の小屋でやった時に、弟に似た子が通りを行くのが見えたの。飛び出して追いかけたんだけど、見失っちゃって。それで、旅をするのはやめにして、此処で探したいって思ったの

清 弟さんとは何で離れちゃったんだい？

茜 父さんと母さんが死んでしまって、孤児院に入れられたのよ。その時別々にされたの。弟がどこに入ったかは知らないわ

清 何で別々に…

茜 分からない。とにかくそこが嫌で嫌で逃げちゃったのよ。それでサーカスに入れてもらったの。…でも、浅草で遊んだりしてるんだったら、あの子は幸せにやってるのかもしれないわ

清 俺も手伝うよ

茜 え？

清 弟さん探すの手伝う。あの辺にいるかもしれないんだろ？時間作って一緒に探そうよ

茜 ……ありがとう

清 一つ聞いていい？

茜 うん

清 そんなに欲しかったの？あの靴

茜 ……欲しかったって言うか、懐かしかったんだわ。昔ね、あれにそっくりな靴を父さんが買ってくれたの。嬉しかったんだ。見てたら何か思い出しちゃって。気づいたらカゴに入れちゃってた。盗もうなんて考えたんじゃないの。ホントよ。気づいたら……本当に「めんなさい」

清 分かったよ。いつ行けるかなあ浅草。あ、ねえ、どうせ行くなら映画も見ないかい？

茜 え…

清 前にさ、「巴里の屋根の下」を弾いてたよね？

茜 巴里の、屋根？

清 そうだよ。タラランランラー、タラランランラーって

茜 ああ、あの曲、そういう名前なのね

清 知らなかったのかい？

茜 あれは、サーカスの人が歌ってくれて、覚えたから。いい曲だからやるといって言われて

清 そうか。じゃあ映画は観てないんだ

茜 映画なんてもう随分観てないわ

清 じゃあ、今度一緒に観ようよ。「巴里祭」ってのがもうじき東京倶楽部にかかるといって言われて「巴里の屋根の下」と同じ、ルネ・クレール監督だよ



茜 へえー…

清 おいゝから

茜 悪いわ

清 大丈夫だよ。心配すんなって。せつくだから観よう。もちろん、弟さんもちゃんと探すよ

茜 (うなづき)ありがとう

一緒に去る二人。音楽「巴里の屋根の下」と共に暗くなる。

■その三 八月半ば頃 ■

音楽小さくなり、長吉のチンドン音の音を合図に、東京音頭の大合唱。ハッと明るくなると長吉の家。

長吉一家の他に、誠治郎、ウメ、清、寅雄、関口もいる。大人たちは葡萄酒や日本酒を飲んで出来上がっている。関口以外、茶碗を叩いたり踊ったり、口三味線で騒がしい。ひとくさり歌って落ち着くと

誠治郎 いやー小唄勝太郎さまさま！お盆だけじゃなくて正月も節分も東京音頭でええじゃないか！

長吉 そうだそうだ。それで年中仕事がありやあ言うことなし！

誠治郎 酒は美味しいし仕事もある。ハナさんの腹も順調で！いい事づくしだねえ

ハナ ん？ムハハハハハッ

ハナは葡萄酒のビンを抱えて注いでは飲んでいる。

ウメ あらら、ハナさん、もういい加減にしなよ

寅雄 そうだ。こっちにも回してくれ

寅雄、ハナからビンを取り上げ、自分に注いで誠治郎へ回す。

誠治郎 先生、葡萄酒、ありがとうございます

関口 いいえ、いつもお邪魔させて頂いているお礼です

清が、ツマミなどを持って入ってくる。

寅雄 礼を言うのはこっちだよ。なあ兄さん、先生のツテで、清に挿絵の仕事が来たんだぜ

関口 清くんの絵が素敵だからです。私はただ、向うの方にお見せしただけ

ウメ (清に) ホントに一枚四円で買ってくれるのかい？

清 ええまあ

ウメ へえー、大したもんだねえ

長吉 けっ、そんな仕事は水もんだ。その雑誌が無くなったら終わりじゃねえか

誠治郎 それを言ったら何でもそつだよ。チンドン屋だっていつまであるか分からねえ

長吉 何いっ

関口 編集の方が、とても褒めてらっしゃったんです。これを機にもっと仕事広がるかもしれませんわ

長吉 清、夢みてえなことを考えねえで、早く太鼓覚えろ！仕事手伝え！

関口 辰野さん、前にも言いましたけど、強制は良くありませんわ。もっと清くんの可能性を伸ばしてあげるべきです。私、思うんです。清くんの絵は今でもとつても素敵だけど、絵の学校へ行つて勉強したら、もっと揺るぎない力をつけられるんじゃないかって。どうか広い視野で彼の将来を

長吉 絵の学校？そんなもん行く金、誰が出すんだい。あんた代わりに払ってくれるのか？

関口 ……

寅雄 あれだろ、すぐにつて訳じゃなくてさ、そついう道もあるつてご提案だよ。カリカリすんなつて。先生はさ、俺たちにまだ見ぬ世界を開いて見せてくれるんだよ。…俺さ、こんなこと言えた義理じゃねえけど、清が、勉強できねえつてふてくされる気持ちが分からなかつたんだ

ハナ 寅雄

寅雄 すまん。いやそつじゃなくて、分かつたんだよその気持ちが。この人に教えてもらつと面白えんだよ。もつと聞きたい。こりゃあもつと勉強したいつて気持ちになるはずだつてな

ウメ へえー

寅雄 ホントだよ。阿保面してねえで、あんたらもいっぺん教わつてみなよ

関口 寅雄さん

寅雄 勉強するのはいい事づくしだぜ。源太なんてさ、漢字を習って、初めて文をしたためた。それで、玉ノ井のお美津に渡してさ、今じゃすっかり馴染みだよ。もう通いつぱなし(笑)

長吉 バカ野郎

ウメ 何だか急に下種な話になったねえ

誠治郎 まあ勉強は、そのうち考えさせてもらうよ。親方、こっち飲まねえか？

長吉 いや、これでいい。茜、一本持ってきてくれ

茜の声 はい

誠治郎 そうかい。こっちも美味いぜ。長野の「実家で作ってるんですかい？

関口 いえ、いえ、この農園で

ウメ 農園って、いとこさんの土地ですか？

関口 ……ええ

ウメ そつですか。うらやましいねえ…。私はね、やっぱり、自分の土地を持つてみたいんですよ。親も兄貴も百姓ですけど、ずっと人の土地ばかり耕して、ちっとも思いつみづらにならなくて

誠治郎 いいよ、そんな話は

ウメ 私、やっぱりあの話は良い話だと思っんですよ

誠治郎 だからいいつて

茜が新しい酒瓶を持って来て、長吉に注ぐ。

ウメ 先生に「プロポー」と一緒だつて言われて心配になつちやつてさ、もういつペン大家さんに話を聞きに行つたんです。そしたら、使われていない土地が沢山あるつて。それでなくてもきちんとい取つた土地なんだから心配ない。向うじゃみんな仲良へやつてるつて

関口 それは違いますわ。この戦争は、欺瞞に満ちた正義の戦争なんです。誰もが地主になれるとか、王道楽土なんて聞「えのいい言葉で目くらましをして、戦争に協力させようとしてるだけです

ウメ でも

関口 私、みんなが東京音頭で毎日踊っているのも、その方が都合がいいからじゃないかって思っんです。今何が起きているか考えもしないで、ただ踊ってもらっている方が都合がいいって。誰かがそう思ってるんじゃないかって

誠治郎 そりゃ考えすぎですよ。盆踊りは毎年あんだから。たまたまこの唄がバカ売れしただけ。なあ

寅雄 ん、ああ。まあ何つーか、クセになる唄だからな

長吉 そうだ。こつちは東京音頭でも丸の内音頭でも何でもいいよ。流行れば飯が食えるんだ！

関口 とにかく、満州へ行くのはお勧めしませんわ

ウメ 私は、一回でいいから自分の土地を持ちたいんです。小さな土地でもいい。自分の土地で自分の家を建てて暮らしたい。難しいことは分かりません。でも、今より少しでも余裕のある生活がしたい。ただただ、それだけなんですよ。それがそんなにいけない事ですか？

誠治郎 そんなこと、先生に言ったってしょうがねえだろう

ウメ だって…もうちょっと余裕があったら、あの時もっと早く病院に行けたら、タケシは死なずに済んだじゃないか？

関口 ……え？

誠治郎 また。いつまでも昔の事ばかり言うな

ウメ あんな事はもう嫌だよ。あんだって、紙芝居やめたのは、子供見るのが辛いからだろう？

誠治郎 ……

関口 私…

寅雄 まあ、飲めよ

寅雄、葡萄酒を誠治郎の湯呑に注ぎつつするが、丁寧に制する誠治郎。

長吉 誠治郎んとこの息子はな、二年前にガス壊疽で死んだんだ。先生、あんたの言うことは正しいのかもしれないよ。そら分からねえ。でも正しかったら何だ？あんだ、清に色々押し付けて言うけど、あんだって自分の言い分を押し付けてんじゃないか

関口 そんな

長吉 確かに、俺ら何も分かつちやいないのかもしんねえ。でもとにかく、目の前にあるもん引っ挿んで生きてくしかねえんだ。あんたみたいに何不自由なく育った人間とは違うんだよ

清 親父っ

長吉 お願いしますよ。清のことも、もう口挟まないで下さい。あんたにウチのことは分からねえよ

関口 申し訳ありませんでした。でも、皆さんのためを思って

長吉 それがお節介だつて言うんだ。良かれと思えば何やったつていいのかい？

関口 ……いえ

清 僕は嬉しいですよ。絵の学校にも興味あるし、先生がそんなに僕のこと買ってくれるなんて光栄です

関口 ……清くん

寅雄 もういいじゃねえか。色々あるよお、みんなよお。でももうやって飲める。葡萄酒もある！仕事もある！みんな元気だ！な、それで、ええじゃねえか！ほれバンザーイ！バンザーイ！バンザーイ！ほれ誠治郎、バンザーイ！バンザーイ！清も、姉貴も、バ、あれ？寝てやがる

ハナはいつの間にか口を開けて寝ていた。

寅雄 まいいや、バンザーイ！バンザーイ！バンザーイ！(と言いながら誠治郎を立てせる)

寅雄・誠治郎 バンザーイ！バンザーイ！(と言いながら、寅雄が清を立てせる)

清 ええっ？

清も立ち上がって一緒に万歳三唱。茜、笑い出し、ウメに酒を注いでやる。

ハナ うるさいよ！

寅雄 ごめん。一人だけ寝ちまうからだろ

ハナ ちょっとはばかり(去る)

関口 私、そろそろ失礼しますわ。すっかりお邪魔してしまって

寅雄 もう帰るのかい？まだ宵の口だよ

関口 ちょっと、飲み過ぎてしまったみたいだから

誠治郎 先生、今日は美味しいお酒、ありがとうございました

関口 いえ。…辰野さん、お邪魔いたしました

寅雄 送ってくよ

フツツいて寅雄に寄りかかってしまう関口。

寅雄 ……あららホントだよ。先生、飲み過ぎだよ

関口 ごめんなさい（少し気分が悪い様子）

寅雄 無理することねえや。ちょっと休んでから帰りな。いいだろう？

長吉 ……ああ、奥の部屋使えよ

寅雄 どうも。…先生、足元気をつけて（関口を支えて奥へ去る）

清 親父、さっきのはあんまりひどいよ

長吉 本当のことじゃねえか。あのべらいい言わねえと分からねんだ

誠治郎 まあでも、悪気があつてのことじゃない。悪い人じゃねえのは確かさ

ウメ ……あんた、そろそろ帰るかい？

誠治郎 え？

ウメ だって、明日も昼は街廻りして、夜は盆踊りだろう？ちゃんと寝て、しっかりやらないと

誠治郎 昼はねえよ。明日は盆踊りだけだ。なあ親方

長吉 うん。まあ「うちは構わねえから。良けりやあゆっくりしてけよ

寅雄が奥から戻って来る。

誠治郎 先生、大丈夫かい？

寅雄 ああ

誠治郎 …しかし、またちよくちよく防空大演習なんてやるのかねえ

長吉 さあ。大事なことだろうけど、あれがあると仕事がつづらくてな

寅雄 全くだ。夜は夜で街中真っ暗にしてさ。ソツとすんだよ

長吉 いい大人が。暗いと怖いか(笑)

寅雄 違うよ。鳥目だから危ねえんだよ

ウメ でも、本当にソビエットの飛行機がこんなところまで攻めて来るのかねえ

誠治郎 さあな。そんな事になったら電気消したぐらいじゃどうにもなんねえだろう

長吉 大丈夫だ。前の戦争だってそんなことにならなかったじゃねえか。海軍が海でやっつけてくれるさ

寅雄 そうだよ。あれだろ？演習だろ？演習ってえのは転んだ時の何とかだろ？

誠治郎 こりゃいいや、転んでから杖掴んだって遅いぜ！

皆、笑う。戸口に刑事らしき若い男と江藤がやって来る。緊張する一同。

長吉 これは、大家さん…

江藤 お楽しみ所申し訳ないが、刑事さんが聞きたいことがあるそうだね

刑事 ここに、関口という女の教員は来ているか？

沈黙。茜は刑事から顔を背けている。

長吉 いえ、こちらにはおりません

刑事 本当か？

長吉 ええ。まあ、ご覧いただいた通りバカばかりで。先生なんてここ立派な方は

刑事 (江藤に)「この家に部屋は幾つありますか？」

江藤 奥にもう一つあります

刑事 あがらせてもらう

長吉 それは「勘弁を」

刑事 何故だ

長吉 女房が、つわりが酷くて寝ておりまして

刑事 確認するだけだ。起こしたりはせん

長吉 それが、着物に酒をこぼされまして、今、一糸まとわぬあられもない姿で

刑事 何か着せればいいたろうっ

長吉 あいにく洗濯が間に合わず。…実は、大方の着物を質に入れちましましてね。着替えも余りないんでございますよ。本当にお恥ずかしい限りで。布団もかけずに転がっておりますもんで、申し訳「ございませんが、今日はどうか。この通り「勘弁くださいませっ

一同、じつと若い刑事を見つめている。

刑事 何だ貴様ら、着物を質入れしてまで酒を食らうとするのかっ！この非常時に、なっとらん！

一同 申し訳「ございません

江藤 申し訳ありません

刑事 い、いえ。…酒は自肅しろ。今後も、不良教員とは関わらない様に

寅雄が立ち上がりそうになるので誠治郎が押さえる。刑事は出て行った。

江藤 辰の家さん、お邪魔しましたね

長吉 いえ、とんでもない「やっ

江藤 明日もまた、頼みますよ。盆踊り



長吉 はっ

江藤 三味線が良くはないですか

長吉 え？

江藤 いや、鍵盤もいいが、盆踊りはやっぱり三味線が合うんじゃないかと思ひましてね

長吉 ああ、はい。じゃあ、おタキさんに声をかけて都合つけてもらいます

江藤 うん。それがいい。では、もう遅いですから程ほどに（去る）

身動きしない一同。誠治郎がそと表を見に行き、みんなに大丈夫の合図。一同、一気にほどける。

ウメ はあー、もう寿命が縮んだよ

寅雄 不良教員なんて言いやがって。俺は不良って言葉を聞くと無性に腹が立つんだ

誠治郎 やめときなつて。ホラ、飲み直した

清、人知れず隠した文集を取り出し、複雑な思いで見ている。奥の部屋を見ている長吉。

ウメ （尻の下から赤い靴を出し）あら、尻の下に敷いたからべちゃんこだよ

茜 あ、それ私の

ウメ えっ！これあなたのっじゃあ……！！にあるじゃないか先生の靴。ひゃー見つからなくて良かった。あんだこんなの持ってたかい？

茜 ええ。親方を買っていただいて

誠治郎 しかし親方、一糸まとわぬ女房が、とは機転が利いたね

一同、笑う。

長吉 みんな、すまなかつたな

誠治郎 親方が謝ることじゃねえよ

ウメ でもやっぱり、あの先生は、連れてかれるような事をしたのかねえ

清 先生は悪いことなんかしてないよ

寅雄 そうだ

ハナが便所から戻って来る。

誠治郎 よっ！一糸まとわぬ天女さま！

ハナ はあ？何だいそれ

誠治郎 よくぞ今まで厠にこもってくれたっ

ハナ 便所で寝ちまったんだよ

誠治郎 道理で臭いはずだ。お臭いっ

ハナ うるさいっ、クソはひつつけてねえよ！

誠治郎 よっ、クソをまとった天女さま！

ハナ バカヤロー(また葡萄酒を飲もうとする)

寅雄、ハナから葡萄酒を取り上げ、誠治郎に。寅雄が音頭を取り、また東京音頭を歌い出す一同。

#### ■その四 八月の終わり■

一同の歌にかぶせて音楽「東京音頭」が流れ始めると、絲川夢子解説員が登場。その解説の中で一同前場からの転換及び、長吉、誠治郎は扮装を整え、チンドン太鼓とゴロスを準備。タキが三味線を持ってやって来たら三人揃って真ん中で演奏。盆踊りを盛り上げる。その周りで踊る人々。

江藤がやって来て、踊り手の間を縫いつつ、振り直してやったりとアドバイス。

絲川 昭和八年に流行した「東京音頭」は、前年に作られた「丸の内音頭」を、東京市民が歌いやすい様に

改訂した盆踊り歌でございませう。歌いだしが「ハア」で始まる「ハア小唄」は小唄勝太郎さんの十八番勝太郎といいますが、女性シンガーでございませう。

彼女が歌ったこのレコード、発売当時だけでも二二〇万枚の大ヒット。毎晩、東京中の老若男女が踊り狂ったそうです。長引く戦争への不安。思想の弾圧。学問の自由も奪われようとしていたこの時代、一つの現実逃避でございませうか？さて、この「東京音頭」、思想善導に持って「い」と各省がヒットを後押しした。とも言われておりますが、その辺いかげんしょうか？江藤さん？

江藤 (踊りの輪を離れて)はいはい。どうも、江藤です。こちらは第一高等小学校の校庭です。

盛り上がっておりまーす。盆踊りは楽しいー元気になるー一つになれる。日本人の心です。  
海だー花火だー盆踊りだーいいですねえーニッポンの夏ーどうもありがとうございましたー

踊っている人たちとチンドン屋たち、江藤に先導されて去る。東京音頭も小さくなっていく。

絲川 こちらこそありがとうございましたー質問には、答えるようで答えない。今も変わらぬ常套手段。  
それでは引き続きご覧ください。時は流れ、夏も終わりの夜のこと。

虫の音。街の一角の街灯の下。清と茜が談笑しながらやって来る。

茜 面白かったわね

清 うん

茜 あの女優さん、本当に可愛らしかったわ

清 アナベラだね。うん、良かったよ

茜 町も可愛らしくって素敵だった

清 うん

茜 あと…来々軒の中華そばも美味しかったわ

清 もっといいものをご馳走してあげたかったんだけど

茜 ううん、充分。ホントに美味しかった。瓢箪池で食べたアイスクリンも

清 でもあれは入れ方がずるいよ。五銭で山盛りだなんて言っどいてコーンカップの中は空っぽなんだぜ

茜 (笑)上手く入れてあったわね

清 今度は、洋食をこ馳走するよ

茜 ううん、悪いわ

清 大丈夫だって。任せとけ

二人、笑う。

清 でも、弟さんは見つけれなかったね。何か手がかりがあればなあ……考えたんだけどさ、浅草で見たからってそこに住んでるとは限らないよね。浅草にはただ遊びに来ただけで、住んでいるのは別の場所だったこともある

茜 ……そうね

清 弟さんが、今も孤児院に入ってるとしたら、東京中の孤児院を調べて、一軒づつ探すよりないんじゃないかな。俺、調べてみるよ

茜 ありがとう。でもいいのよ。そのまましてくれなくて

清 どうして

茜 弟は見つけたいけど、キヨちゃんだって、絵を描いたり仕事を探したりしなきゃいけないもの

清 それもちゃんとやるよ

茜 ……チンドン屋さんは、どうしてもやりたくないの？

清 ああ

茜 どうして？ 恥ずかしいから？

清 恥ずかしいよ。だってハエの格好させられたりさあ。自分が通った学校の近くまで行くんだぜ。あんなの友達に見つかったら、たまったもんじゃねえよ

茜、笑う。

清 キミは恥ずかしくないの？

茜 私は、この辺に知り合いもないし。でも、もし居たっていいわ。楽しいもの

清 へえ

茜 キヨちゃんは、本当は勉強がしたいんだものね。学校の先生になりたかったの？

清 うん。母ちゃんがね、あ、母ちゃんって本当の母ちゃんね。俺に教員になって欲しかったんだよ。俺が勉強するのをすごく喜んでくれてさ、オヤジに何言われても応援してくれたんだ。

だからもう、それだけで学校受けようって決めてた。先生になりたいかどうかなんて考える前にさ。ただただ、母ちゃんを喜ばせたかったんだ。でもいなくなったからね。俺の真ん中から「う、柱みたい

なのがズコーンと引き抜かれちゃってさ、穴が開いたんだよ。今、色々考えてっど」

茜 ……そう

清 しかしなあ、あんな映画観ちゃうとこの街が嫌になるね

茜 どうして？

清 だって、こんなジメジメした街。あーあ、早く抜け出して、フランスにでも行ってみてえなあ

茜 私は好きだけど、この街

清 嘘だろ。サーカスで色々周ったんならもっとうい街知ってるだろ

茜 そりゃ色々行ったけど…。そうね、一番好きなのは生まれた街。でも今はここが一番。  
親方もハナさんも優しいし、キヨちゃんもいるから

清 そっか。…じゃあ頑張つて弟さん探して、見つかったらみんなと一緒に住もう

茜 ホントに？あそこに五人、あ、ハナさんに赤ちゃんが生まれたら六人になるわね(笑)

清 狭くていやかい？

茜 ううん、そんなことない。楽しそう

清 じゃ、絶対見つけよう

茜 うん！

清、茜と指切りをする。ハナが腹を突き出して精一杯急いでやってくる。

ハナ 茜っ！

茜 はいっ

ハナ 早くお帰り

清 なんだよ、今帰ろうと

ハナ、何も言わず茜の手を引いてドンドン去る。

清 おい、俺も帰るよっ

源太が走って来て

源太 キヨちゃん！

清 え？

源太 兄貴見なかったか？

清 見ないよ

源太 そうかー。参ったなあ

清 どうしたの？

源太 兄貴、バイの途中でいなくなっちゃってよお。…キヨちゃんでもいいや。頼む、スケてくれっ

清 は？

源太、清の手を引いて去り、縁日の大きなざわめきの音と共に薄暗くなる。

縁日の雑踏が遠のき、虫の音に戻り始めると、寅雄と浴衣姿の関口が、神社の方から降りて来る。

寅雄 張っちゃいけない親父の頭。張らなきゃいけない郵便切手。切って恨みを貼らしゃんせ。這えば立て立てば歩めの親心。ハエが手をする足をする。ハエが飛べば虻も飛ぶのは当たり前。あいつは馬鹿でも長男だ。馬鹿とハサミは使いよう。馬鹿につける葉なし。馬鹿の大食い、馬鹿の一念親をも食らう。馬鹿の馬鹿呑み馬鹿太り、馬鹿を見ただけりゃ親を見ろってね。バカバカどうもすいません

関口 (笑)すごい。良くそんなに口が回るわね

寅雄 いやいや、ずっと言ってるいや誰でも出来るよ

関口 私には無理だわ

寅雄 口から生まれた啓子さんでも？

関口 (笑)ありがとう。寅雄さんと一緒に楽しかったわ

寅雄 もっと見たいところあるかい？

関口 ううん。もうお店に戻らないと。源太さん一人で大変でしょう？

寅雄 平気だよ。あいつは先生に勉強してもらっていい事あった。俺が代わりに恩返しだ

関口 ホントに。寅雄さんのおかげで射的も金魚すくいも上手く出来たわ

寅雄 コツだよコツ

関口 そうね。驚いた

寅雄、関口より下の段へ降りて見上げる。

寅雄 いいねえ

関口 何回言うのよ

寅雄 いやあ、やっぱり女は着物がいいや

関口 着物って、浴衣よ

寅雄 浴衣だって着物よ

関口 (笑)もおー。いつもは野暮っただいって言いたいのね？

寅雄 とんでもねえ。いつもの凜としたお姿もお素敵だけどさ、今日は一段と女っぷりが上がったよ

関口 上手いわねえ

寅雄 浴衣着て盆踊りかい？

関口 いいえ。「めんなさいね。皆さん、そのおかげで仕事もあるんだから良いことなのかもしれないけど、私はどうしてもあの中に入る気になれないの。見ていると、ぐるぐる回りながら、みんな火に飛び込んで行く様な気がしてくるわ。夏の虫みたいに」

寅雄 そうかい…。じゃあアレだ。浴衣着て、俺に会いに来たんだな

関口 そうよ(笑)。何だか、源太さんとお仕事してる寅雄さん見てたら、羨ましくなっちゃったわ

寅雄 えっホントかい？

関口 ホントよ。すごく楽しそうなんだもの

寅雄 まあ楽しくなくはねえが、結構大変なんだよ。色々仕来りもあるし、稼ぎもそうある訳じゃねえし

関口 そこからまた、あの…シヨバ代、払うのよね？

寅雄 そうだよ。でも昔よりはいい。若いうちにはさ、朝早い時間しかやらせてもらえねえんだ。  
そんでバイの上りは、全部親分に渡す

関口 全部？

寅雄 そうだよ。ちよろまかしたりしたら大変だよ。で、渡した分から親分が小遣いくれるんだ

関口 それでいいの？

寅雄 いいんだよ。そやって今まで上手くやってきたんだから

関口 私には分からないわ。そんな風に搾取されて

寅雄 サクシユ？

関口 親分が得をするようになってるんでしょ？

寅雄 …良く分からねえけど。そういうもんなんだよ。盃もった以上は、親分は本当の親以上の親なんだ。俺ら、親分がいなかったら何も出来ねえしな

関口 そうなの？

寅雄 そうだよ。店だつてどこでも好き勝手出せる訳じゃねえし。すごいんだぜ。ああやってバイしてる連中はさ、ウチのもんだけじゃねえんだ。他の一家からも、東京以外からも集まってくんだぜ。  
それを仕切ってシヨバ割りして、面倒見てんのがウチの親分。そいつの一家の貫録を考えてさ、同じ商売が食い合わねえ様に割り振って、何かありゃあ丸く収める。みんなで商売繁盛！公平に儲かるようにしてんだ。俺はあんな事できねえよ。喧嘩しちゃうから

関口 (笑)そう。…みんなが、そういう、いい指導者ならいいのにな

寅雄 ぶっしたんだいさつきから。元気ねえな

関口 今日、校長先生に呼び出されて、文集を作るのをやめる様に言われたわ



寅雄 え、何で？

関口 色々言われたけど理解できなかった。秩序を乱す可能性があるとか、今の社会情勢に反するとか、曖昧なことばかり。中身を見せて、ただの文芸誌です。卒業生の詩や短歌や本の感想文です。社会を乱す様なものではありませんって説明したの。…でも、ダメだったわ

寅雄 …じゃあどうするんだい？やめるのかい？

関口 やめないわ。教科書が変わったり、だんだん、学校で自由な教育ができなくなって来ているのよ。それなら外でできる事はないかと思って始めたの。子供たちには、誰かに強制されたんじゃなくて自分の考え方を持って欲しいのよ。…でも、卒業生の家を気軽に訪問する事はできなくなるわね

寅雄 清んとならいいだろう

関口 …辰野さんには、もう来ないでくれと言われたわ

寅雄 なんだよ兄貴。俺が言ってやるよ

関口 いいの。確かに清くんのお宅に「迷惑をかけすぎたもの。色々出過ぎた事を言ってしまったし

寅雄 そんな事ねえよ

関口 いいえ。私、反省したの。辰野さんの仰る通りよ。私、清くんのおウチの事も、誠治郎さんたちの事も、全然分かっていなかったわ。それなのにイイ気になって。土足で踏み込む様な事をして

寅雄 違っよ。先生はいつも、俺らに見えない物を見せよう、教えようとしてくれてんだよ。何が悪いんだ

関口 …

寅雄 どうした、元氣出せよ。口から生まれた啓子さんか。…俺は何があっても先生の味方だよ

寅雄、小指を差し出す。関口、寅雄と指切りをして

関口 ありがとう

寅雄 ウチまで送るよ

関口 大丈夫よ。もうお店に戻った方がいいわ

寅雄 危ねえから、送るよ

関口 うなづき、二人、歩き出す。

寅雄 先生は、ずっと一人か？

関口 え？

寅雄 いや、結婚しようと思ったことねえのかい

関口 結婚してたわ。もう随分前だけど。夫は亡くなったの

寅雄 ……すまねえ

関口 ううん。とつても年が離れていたから、最初から覚悟してたわ。でも好きだから、結婚してくださいと言ったのよ

寅雄 へえー

関口 とんでもないでしょ？女から求婚するなんて。でもこの人しかいないと思ったから。女学校時代の恩師なの。師範学校に進んでからもずっと力を貸してくれて、あらゆることを教えてくれたわ。社会のこと、文学や芸術。教師としての在り方も。今まで生きて来て、私が一番尊敬している人よ

寅雄 ……そうか。立派な人だったんだな

関口 ええ。でも普段はただのオジサン。お酒が大好きで、毎晩よく飲んだ

寅雄 それで先生も酒飲みなんだな

関口 そうよ。晩酌に付き合ってたらこうなっちゃったの。お酒は教えてくれなくて良かったのにな

二人、笑う。

関口 寅雄さんは？結婚しないの？いい人いるんでしょ

寅雄 いねえよ。俺は一人でいいんだ。気楽でいい

二人、去る。虫の音が続く中、神社の方からタキが降りて来る。二人を見送りつつ三味線を爪弾く。背後から江藤が現れ、タキの肩を掴む。驚いて振り向くタキ。江藤と分かり、頷いて共に宵闇に去る。

清 ウソだろ!?

清の声に明るくなると長吉の家。長吉とハナがいるが、茜はおらず、アコーデオンの音が置かれている。

長吉 本当だ。使いの人が来て連れてった。明々後日ぐらいいは長崎に着くだらうってさ

清 そんな急に…

ハナ いい話だよ。引き取り先は母方の叔母さんでね、長崎の貿易商に嫁いでるんだって。

広い敷地に立派なお屋敷があるそうだよ

長吉 全く、有難い話だな

ハナ あの子は、親が駆け落ちして一緒になったらしくて、親戚がいるのも知らなかったんだってさ。

叔母さんは長いこと、あっちに…どこだっけ

長吉 上海

ハナ そう、上海に住んでたんだって。戦争もあるし、色々考えて長崎へ帰って来たそうだよ。

それで、妹が死んだことや、子供がいること知って

長吉 子どものない夫婦らしい。今度こそ大事にしてもらええな

清 茜は何て言ったんだよ

長吉 あっ

清 茜は行きたいって言ったのか？

ハナ 行きたいかだっけ？そんなの、行きたいに決まってるじゃないか

清 何で分かる。茜がそう言ったのか？一度も会ったことない親戚と、暮らしたいって言ったのか？

長吉 あいつな、弟がいるんだってさ。その弟が先に引き取られて、向うで学校行かしてもらってたんだ

清 ……え

長吉 ハッキリ行きたいなんて言いやしねえよ。ふた月やそこらでもウチに世話になったんだ。気も遣うさ。

でもな、あっち行きやあ弟さんに会えるんだ。生活に困ることもない。

まさかお前、そんなお屋敷から弟さんまで呼んで、一緒に暮らそうなんて言えるか？

好きでこんな長屋に暮らしたいヤツがどこにいるよ。行きたいかどうかなんて聞かなくても分かる。分かることは聞かなくていいんだ

清 ……

ハナ 世の中、仕方のないこともあるんだよ

清 ああ、仕方ねえよ。こんなとこに暮らしてんのも、金がねえのも、上の学校へ行けなかったのも、全部全部仕方ねえことだよなー

ハナ ……

ハナ、奥へ去る。泣いているのかもしれない。

長吉 まだ言ってるやんのかそんなとこーあいつに当たってどうするよ。お前、今の自分で茜に行くなって言えんのか？にいた方が幸せになるって言えんのか？なあ。言えねえよな。毎日毎日フラフラしてるくせに。悔しかったらためえで稼いで家の一軒でも建ててみるよーま、それでも、お前みてえないじけたヤツに女はついて行かねえや

清、何も言い返せず、背を向けて檻に座り込む。長吉、アコーデオンを清の後ろに置く。

長吉 アイツが置いてったぞ。キヨちゃんかもしやる気になったら使ってくださいってよ。  
…頼むから、いつまでも意地張ってないで家のことも考えてくれ

長吉も奥へ去る。清、そつとアコーデオンを抱く。「巴里の屋根の下」を弾こうとするが、全然弾けない。

清 使って下さいって、そんな簡単に弾けるかよっ

アコーデオンを抱いて泣く清。音楽。「巴里の屋根の下」とともに暗くなる。  
暗闇に、絲川夢子が登場し、めくりを置いて語り出す。

絲川 季節が流れる、城寨が見える。無疵な魂なぞ何処にあらうっ？

色々あつた昭和八年。まだ色々ございます。

(以下、都度、めくりを変えつつ) えー、九月、総武線電車が中野まで乗り入れ。

十月、早慶戦の野球試合で水原選手が野次馬の投げたリングを投げ返した、水原リングゴ事件。

雑誌「少年倶楽部」が売れ行き上々。中でも恵まれない黒い野良犬が軍隊で出世する「のらくろ」が

大人気。世界では、十月にドイツが国連のジュネーブ軍縮会議を脱退。

そして日本国内の思想取り締まりは更に厳しくなり

号外売り 号外！号外！号外だよー！

号外売りが新聞を配りながら走って来て、絲川と、アコーデオンを担いで歩いて来た清に一枚つつ渡して走り去る。記事を読む清と絲川。

絲川 官憲は、長野県教員赤化事件を公表。児童に、反戦、闘争意識を注入したとする県下の教員、多数を検挙したとの事。新聞には、小中学校教員の左翼化、後を絶たず。とあります。

この年、治安維持法により他にも多くの人が検挙されました。「蟹工船」で有名な作家、小林多喜二もその一人。共産党員になりました特高のスパイと待ち合わせて検挙され、二月に亡くなっています。

そして、当時生きていた忠犬ハチ公が、世界的な名犬クラブ「ぼちクラブ」の名誉会員となりました。ーそんな昭和八年も、うかうかしている間に、もう年の瀬でございます。(去る)

■その五 十二月二十二日 ■

長吉のチンドン太鼓が鳴り、明るくなると辰の家の街廻り。夕暮れ時。コロスは誠治郎。旗持ちウメ。清も号外をポケットにねじ込んでみんなの元へ。清はアコーディオンが上手く弾けないので、合いの手で音を入れるのみ。旗や背負いビラに「少年倶楽部 陽気に元気に生き生きと「や」のらくろ」二大附録つきー」などの文字。下手なのらくろの絵。長吉や誠治郎が「はい、少年倶楽部新年號が出るよー」

「新年號は、のらくろ」二大附録つきー」「チンドン増える首の星！末は大将元帥かー」

「商店街、西から入って六軒目、あすなる書房で売ってますよ」「今ならのらくろカードを配ってます！みんなで買いに行きましようー」など太鼓を叩きつつ宣伝する。

一廻りして、長吉の締めチンドンで仕事終了。ひと休みしつつ。

長吉 「らくろっさん」

誠治郎・ウメ お疲れ様でした

長吉 ウメさん、大丈夫かい？

誠治郎 なあに、大丈夫ですよ。なあ

ウメ ええ。このぐらいいしか出来なくてすいませんねえ

長吉 いや、助かるよ。おタキさんも、居たら居たで面倒なんだが、居なきゃ居ないで困るよな

ウメ 見つからないんですか？

長吉 うん。元々よく知らねえんだ、あの人の事。探しようもねえよ。コイツが早く上手くなりゃあな

清 練習すれば出来るようになるよ

誠治郎 まあ、手伝ってくれるだけいいじゃないか。これアコーディオン難しいかい？

清 ええ

長吉 まあでも、ウチも他所に負けないように、ラッパかなんか入れたんだけどね

誠治郎 ああ、知り合いにクラリオネットやるやつがいたんだけど、売っちまいやがって。力になれなくてすまないねえ

長吉 いやいや。寅雄もそろそろ帰って来るだろうし、アイツにも聞いてみるよ

ウメ 私らもいなくなっちまうし、申し訳ないことです

誠治郎 本当に、お世話になりました

長吉 いや、こつちこそ世話になって。でも大丈夫かい、野良仕事は

誠治郎 こいつの兄貴も一緒に行くことになったんで、心強いですよ。ただ、大陸は寒いらしいんで

ウメ 地主になれんだから、寒いのがらい何だい

誠治郎 まあ、子も出来るし。踏ん張ります

長吉 そうだな

ウメ あの先生がいたら、またドロボーと一緒にだって怒られそうですけどね。  
私らはみんなと上手くやって行きますから

長吉 うん

誠治郎 あの先生も、元気であるといいけどな

ウメ ホントにねえ……

誠治郎 (震えて) 寒いな。雪でも降るんじゃないかねえか

長吉 帰ろう。飲んでくださる?

ウメを見る誠治郎

ウメ いいよ、少しづらい。私もハナさんに「挨拶させて頂こうかね

長吉 (清におい

清 俺はちょっと。練習していくよ

神社の方へ上がっていく清。豆腐売りのラッパの音。

誠治郎 キヨちゃんーこれ、(ノ)ロス(もう使わねえから親方に預けるよ。こっちの方が易しいんじゃないかねえか

清 ありがとう。お元気でー

ウメ キヨちゃんもねー！

清、神社の境内で腰を降ろす。アコーディオンで「巴里の屋根の下」を弾き始める。

やっぱり上手く弾けない。口で歌っては鍵盤を探して弾いてみる。やがて飽きてアコーディオンを置く。清がアコーディオンを始めると、その背後に帽子を目深にかぶった男がしのび寄り、肩を掴む。

驚いて振り返る清。男がゆっくりと帽子を取ると、長い髪が垂れる。男だと思ったのは関口。

清 先生っ

関口、ジエスチャーで「静かに」と清をいさめるが、自分で笑い出してしまふ。

関口 「めんなさいね。びっくりした？」

清 な、何やって、何なんですかその格好は

関口 (笑) 似合ってますよ

清 どうにいたんですかっ、ずっとずっと、心配してたんですよー！

関口 「めんなさい。色々あって、知り合いの所に身を寄せていたの。でもそこも居づらくなってしまっただけ。今日出て来たのよ」

清 ……そうですか。とにかく、「無事で良かったです。先生がいなくなっただけから」こんな記事を見て(号外の記事を渡し)「これに関係があるのか」と思っただけで心配してました

関口 (記事を見て)「長野の事件ね。私はこの村の出身ではないけど、知合いが何人か検挙されたわ。…清くんはどっついていたの？」

清 相変わらずですよ。でも、最近は家の仕事も手伝ってます

関口 そう。挿絵の方は？

清 あっちは、雑誌が廃刊になって

関口 そうなの。良いつながりが出来ると思ったんだけど、結局力になれなかったわね

清 そんな、とんでもないですよ。最後の号、出せなかったんですけど、経理の石川さんが稿料を工面してくれて、有り難かったです。あと、茜に親戚が見つかって長崎に行きました。弟さんも一緒に

関口 そう。それは良かったわね

清 ええ。…あと、誠治郎さんとウメさんはやっぱり満州へ行くそうです。子供が出来て。心機一転だっ  
て言っていました。それからタキさんがいなくなって。人手が足りなくて、親父は頭抱えていますよ(笑)

関口 お母さんは？

清 ハナさんは、お腹がもうこんなですよ。それでも飲んでるけど

二人、笑う。

関口 寅雄さんはどうしてるの？

清 旅の仕事に行ってます。正月は「うちで仕事だろうから、そろそろ戻ると思いますよ

関口 そう

清 まあ元気ですよ。あの人なら。…先生、これからどうされるんですか？学校に先生のこと聞きに行ったら、もう辞めたって言われて

関口 校長先生がそう言ったの？

清 いえ、桜井先生が

関口 …

清 文集の原稿は、みんなで書き溜めていますよ。先生が戻ったらすぐ出せる様にしようって。  
僕も、絵だけじゃなくて、映画の批評を書きました。キングコングで

関口 (笑)すごいじゃない。読みたいわ。…でも、残念だけど、しばらく文集は無理ね

清 え…



関口 私ね、この後、人に会うのだけど。それからしばらく、よそへ行くことになると思うわ

清 どこ行くんですか？

関口 ……

清 大丈夫、ですか？

関口 大丈夫よ

清 痩せましたね。先生

関口 清くんに、お願いがあるの。誰かに私のことを聞かれたら、知らないって言っちゃうだけ。今日会ったことも、誰にも言わないで。それから、文集は焼いてしまいなさい

清 そんなことできません

関口 お願い、そうして。みんなにもそうした方がいいと言って

清 ……

関口 大丈夫。形は無くなっても、心の中にきちんと残っているはずよ…じゃあ行くわね

関口、神社の坂を走り降りて行く。

清 もう会えないんですか？

関口 (笑)会えるわよ、もちろん。清くん、こんな馬鹿な戦争はきつといつか終わるわ。そしたらまた、一緒に新しい文集を作りましょう。だから、それまで何があっても、生きていきましょうね

清 はい

関口 どんな事も、自分の心と頭で良く考えるのよ。そして、自分の中にしっかりと柱を立てるの。折れ曲がったり、壊されることもあるかもしれない。でも、そしたらもう一度立て直せばいいわ。

清、うなづく。

関口 ではね

関口は走り去り、見送る清。音楽と共に溶暗。

■その六 十二月二十二日の夜から二十三日の朝■

ぼつと明るくなる。長吉の家。旅から帰った寅雄は長吉と花札をしており、ハナは寅雄の土産を物色。清は机に向かい、絵を描いている。

長吉 困ったもんだよ、みんななくなっちゃまいやがって

寅雄 誠治郎もとうとう観念したか

長吉 まあ、やっと子供が出来たんだ。今度こそと思う、ウメの気持ちも分かるけどな

ハナ そうだよ。今より良くなるんだったら、誰だってその方がいいさ

長吉 寅雄、お前、楽隊に知り合いいねえか？

寅雄 楽隊？

長吉 ああ、最近はや、チンドン屋にラッパ吹けるヤツが結構いるんだよ。活動でブカブカ吹いてたヤツらだつてよ。知り合いに居たら紹介してくんねえか？

寅雄 俺は知り合いいねえけど、仲間内に付き合いのあるヤツもいると思う。聞いてくよ

長吉 悪いな

寅雄 いや。。。でもあれだろう？その、おタキさんが見つかれば済むんだろ？そっちは探したのかい？

長吉 探した。。。という程探してもねえけどな。よく知らねえんだ。あいつの事

寅雄 ……そうか

長吉 とにかくさ、なるだけデカイ音が出る楽器がいいんだよ。車もうるせえし、三味線じゃ聞こえねえよ

寅雄 デカイ音が出る楽器だな。分かった

ハナ あら寅雄、これいいじゃないか

ハナ、土産から櫛を見つけて髪にさす。寅雄、慌てて櫛を取り

寅雄 これは違うんだよ

ハナ 違うって、じゃあ誰んだい

寅雄 誰んでもいいだろ

ハナ たまには姉え様にも買って来いってんだよ

寅雄 姉え様には買ってやったじゃありませんか、干し芋を

ハナ 食いもんバツカリ。まだ女捨ててないんだからね

寅雄 デカイ腹してよくいうよ。欲しかったら兄さんに買ってもらういな

ハナ ああ、そうしてもらおうかねえ

長吉 お前の番だぞ

寅雄 へいへい

寅雄、花札に戻る。ハナ、干し芋の箱を清に差し出し

ハナ キヨちゃん、食べるかい？

清 いや、い

ハナ そんな、何も食べないで。腹減ってるだろ

清 ありがとう。でも今はいいよ

ハナ ……そうかい（元へ戻る）

寅雄 何だ。飯も食わずに描いてんのか？

ハナ ああ。帰るなりずっと

寅雄 へえー、精が出るね。関口先生様様だ。毎月決まった仕事があるってな有り難えこつた

間

ハナ 違つよ

寅雄 あ？

ハナ あの前先生がくれた仕事は無くなったんだよ

寅雄 無くなった？

ハナ ああ、雑誌がつぶれたんだってさ

寅雄 そうなのか。…関口先生はどうしてんだ？

清 ……

ハナ あの先生もいなくなったんだよ

寅雄 何で

ハナ 知らないよ。キヨちゃんも友達と一緒にアチヨチ探したんだ。でもないんだよ

長吉 おい、早くやれよ

寅雄 (花札に戻ろうとするが) あれじゃねえのか？みんなで先生のこと邪魔つけにしてよ。  
居つらくしたんじゃねえのか

長吉 あ？

ハナ 何言ってるんだい。あんたが悪いんだろ？ウチで寺子屋みたいな事するから。じゃなきゃ揉めやしないんだ

寅雄 何だよ

長吉 心配ねえよ。大方、田舎へ帰って嫁にでも行ったんだろうさ。女が仕事するってたってその程度のもんだ。清、そんなもんばかり描いてないでしっかり食って寝ろ。明日も仕事なんだ

清、長吉を一瞥するが、何も言わず絵を描き続ける。

ハナ あんた、喧嘩はやめとくれよ

長吉、札を投げ出して山を崩してしまっ。

寅雄 あっ

長吉 仕舞いだ。今日は、のらくろのらくろ言い過ぎて疲れたよ

長吉、奥の部屋へ行こうとするが、立ち止まり

長吉 清、お前、今でも勉強がしてえか？

清 ……

ハナ あんた、大家さんの話…

長吉、何も言わず奥の部屋へ去る。

寅雄 何だい大家の話って

ハナ いいんだよ

寅雄 気持ち悪いな

ハナ、大きなお腹を突き出して寅雄の前にどっかり腰を降ろす。

ハナ ほれ（花札を配れ）

寅雄 え、やんのか？

ハナ いやなのかい

寅雄 ……いやちよっと

寅雄、出かけようと立ち上がる。

ハナ どの行くんだよ

寅雄 ちよっと…探しに行ってくる

ハナ 何を

寅雄 関口先生だよ

ハナ （花札を投げつけ）馬鹿っ！

寅雄 なんだよっ！

ハナ 馬鹿だよお前は。ホントに馬鹿。…もう随分前なんだよ、いなくなったのは。今更バタバタしたってしょうがないんだ。こんな寒い夜に出てく事ない。こっち来な

ハナ、腹が邪魔だが、崩れた花札の山をまとめ始める。寅雄、投げられた札を手に戻ってきて

寅雄 俺がやるよ（花札をまとめて並べ始める）

ハナ …子どもの頃、よく二人でやったねえ。兄貴たちは大きかったし、相手してくんなかったもんね

寅雄 ああ

ハナ あんた、一回もあたしに勝ったことない

寅雄 あるよ

ハナ ねえよ

寅雄 …

ハナ 寅雄、あんた、いい加減いい人見つけて落ち着きな

寅雄 俺から行くぞ

ハナ おお

二人が花札を続ける中、時を刻む音と共に夜は更け、ほの暗く。清は文集を手にしている。

寅雄が花札の山を崩し、勝負は終わり。ハナ、湯呑を台所へ片づけ、着ていた甚兵衛を清にかけてやる。そして土産物を持って奥の部屋へ。寅雄は床でごろ寝。時の音が止む。清、寅雄の傍へ行き体をゆする。

清 タベ、関口先生に会ったよ。誰にも言うなって言われたけど。でも…この街を離れるって言うってた。もういないかもしれないけど、もしかしたら

もう一度ゆすってみるが、動かない寅雄。清、奥の部屋へ去る。

寅雄、起き上がり、土産物の櫛を見ている。しかしまた寝てしまう。再び時を刻む音。

次第に明るくなり朝日が差し込むと、「ポーっ」と遠くでサイレンの音。

寅雄、目を覚ますが、しばらくしてサイレンが止み、また寝転がる。

今度は大きく「ポーっ」とサイレン。寅雄、寝ぼけ眼で起きる。長吉、ハナ、清たちも起きて来る。

長吉 何だ何だ、さつきから

清 何だろう

寅雄 何だ？また防空演習か？

長吉 まさか、聞いてねえぞそんなこと

一同、しばらくサイレンを聴いている。

寅雄 全然終わらねえな

ハナ …まさか、敵が攻めて来たんじゃないだろうねっ

寅雄 えっ…嘘だろ？…どうするの？…どうするの？…

長吉が外へ出て行くというと玄関の方へ。ハナと寅雄、どうしようと言いながらアタフタ。

ハナ あれだ、水だ水！

寅雄 えっ、水？

近隣から万歳三唱の音が聞こえて来る。

ハナ あれ？

寅雄 どういうことだ？

清 違っつ、生まれたんだ！

一同 生まれた？

長吉 ああ、皇太子さまが生まれたんだ！内親王さまなら一回、親王さまならサイレンが二回鳴るって確か言ってた

長吉 ああ

ハナ なんだそっかい。ああ、良かった

「バンザイ！バンザイ！」と近隣からの声。その声に合わせて

長吉・ハナ・寅雄 バンザイ！バンザイ！

ハナ イッタッタッタッタッタああ——！

長吉 ハナ！

寅雄 姉ちゃん、大丈夫かっ

長吉 え、生まれそうかっ？

ハナ うん、うん、イッタタタタあああ

長吉 (寅雄に)おい、奥に寝かしてやってくれ、産婆を呼びに行ってくる。

寅雄 分かった。姉ちゃん、奥行くぞ、立てるか？(ハナを支えて奥へ)

長吉 あと、あれだ、こっとう時は、清、湯だ。湯沸かしとけ！

長吉、走り去る。清、台所へ。近所の万歳三唱がまだ続いている。奥からハナの苦しむ声。清、台所から小さい鍋と小さい薬缶を持って出て来て右往左往。寅雄が奥から出てくる。

寅雄 何やってんだよ

清 お湯、沸かしたいんだけど、どっちで沸かしたらいいかな

寅雄 知らねえよ。て、こんな小っせえの。もっとデカいのねえのかよ

清 ない。あと炭が足りないかもしれない

寅雄 はあ？炭ぐらいちちゃんと買っとけよ！

清 俺に言われても

寅雄 (万歳三唱の声に) るせえな！こっちも生まれんだよ！

源太が走り込んで来る。

源太 兄貴っ、大変だ！

寅雄 いいとこ来た。お前、デカイヤカン借りて来い

源太 は？



寅雄 親分から、ヤカン！生まれんだよ

源太 ああ、生まれたんだろ、皇太子さまが

寅雄 どうでもいいよそんなことあ、生まれんだ

源太 どうでもって、「こっちはどうでも良くねえよ！

寅雄 こっちもどうでも良くねえよ！炭買って来いよ！

源太 え？聞いてくれよ！

清 お願いしますー！生まれるんで！

源太 だから生まれたって

寅雄 生まれるんだって

源太 誰が

清 生まれんだよお、赤ん坊がつ、母ちゃんにい！

源太 ……そっなの？

ハナ (奥から顔を出し) 清っ、…今、何てった？

清 え？

ハナ 今、今何てった？ 今、母ちゃんって、母ちゃんって、母ちゃんって言うタタタタああ——！

寅雄 いいから引っ込んでろよ！

寅雄、ハナを奥へ連れて行く。源太、上り込んで奥を覗きながらうろたえる。

ハナの声 もう一度、言うてテテテ——っ

清 源太さん、親分の大きいヤカン、お願いします。あ、道教えてくれたら俺が

源太 行くよ俺が行くよ。それはいいけど、そっじゃなくてさあ。キヨちゃん、落ち着いて聞けよ。

俺さ、タペ玉の井に行つてさ、フラフラ散歩しながら帰つてたんだ

寅雄が奥から出て来る。

源太　そしたら白鬚橋の下に人だかりがあつてさ、川から女の死体が上がったつて言つんだよ。それで、その死体が関口先生じゃないかつて

清　……え？

寅雄　お前、それちゃんと見たのか？

源太　いやそれが、俺が着いてすぐ警官が来て布かけちまつたんだ。だから見えなくて。

でも、息子が先生の教え子だつていうヤツが居てさう言つた。あと、警官が、多分身投げだらうつて

清　嘘だ

源太　よく分かんねえけどさあ

寅雄　清、姉ちゃん頼んだぞ（出て行くつとす）

源太　寺島署に運ぶつて

寅雄　うん。お前さ、炭、買って来てやつてくれ。途中で親分んち寄つてヤカン借りて来い

源太　炭か、店開いてるかな

寅雄　たたき起こせよそんなの。無理なら親分に一旦貸してもらえ。話せばすぐ貸してくれるよ

源太　分かつた！（走り出て行く）

清　オジサン、先生は、絶対に自分で死んだりしない！

寅雄、何も言わず、ただうなづいて出て行つた。またどこかの家から万歳三唱。

奥でハナが、「イタタタタああ、うるさいんだよ！」と万歳三唱に吠える。万歳三唱続く中、暗転。

音楽。北原白秋作詞「皇太子さまお生まれなつた」。やがて、歌に合わせて国旗を振る男女が神社の方に浮かび上がる。江藤もいる。歌が小さくなると旗を振りつつ神社の奥へと消えて行く。

■その七　十二月三十日　朝■

チンドンを抱えた長吉とゴロスを抱えた清が駅前によつて来る。二人とも寒さに震えている。

商店街の歳末大売り出しの宣伝らしい。旗や背負いビラに八百屋や魚屋の宣伝文句と拙い絵。

長吉 寒いな

清 うん

長吉 駅前だつてのに人が少なえや

清 年末だからね。会社は昨日で終わり。もう正月休みだよ

長吉 世間は休みか。俺らは忙しいぞ。年始廻りもあるし、休めるのは元旦ぐらいだ。覚悟しとけよ

清 分かつてるよ。子供の頃ついてったじゃないか。爺ちゃんも一緒に

長吉 んな昔のことは忘れたよ

清 …来ないね

長吉 うん

清 二二だつて言ったのかい？

長吉 言ったよ

玄米。パン売りの声。大きな旅行鞆を持って江藤がやって来る。

江藤 辰の家さん、おはようございます。

長吉 これはこれは、おはようございます

清 おはようございます

江藤 年末まで精が出ますね

長吉 いやいや、私どもは稼げる時に稼ぐよりないもんで

江藤 清くんも、しっかりお父さんを支える様になって

長吉 いやあまだまだ。二旅行ですか？

江藤 ええ。那須の方へ

長吉 それは宜しゅうございますね

江藤 やあ向うに親戚もおりましてね。家族は先に行かせてあるんですよ

長吉 そうですか

江藤 昨日はホラ、皇太子さまの「命名の儀がございましたから、恐れながら私も宮城へ参りました

長吉 ああ

江藤 いやあ、それは大勢の人が参賀して。斎藤首相をはじめ各界から。力士なんかも来ておりましたよ。待ちに待った親王様の誕生です。皆心一つにお祝いして、私も胸が熱くなりました。……そつだ。「命名と言えば。お名前はもう決まりましたか？」

長吉 え？いや、ウチはまだ

江藤 え、しかし、もうお七夜も過ぎて……。決めかねておられるならお寺へ頼んであげたいが

長吉 お氣遣いありがとうございます。でも、コイツがどうしても考えたいと申しますんで

江藤 ほおー、お兄さんが名付け親ですか。それもいかもしれませんな。良い名をつけておあげなさい

清 はい

江藤 なるべく早くね。しかし、皇太子さまの「誕生と同じ日だなんて、本当に名譽な事ですな

長吉 はあ。先日はお祝いまでいただきまして

江藤 いえいえ。私の身内にもね、もうすぐ生まれそつだと言つのがおありまして、畏れ多くも皇太子様にあやかっつて、男なら明(アキヲ)、女なら明子(アキコ)にしようなどと申しておりますよ

長吉 それは良いお名前だ

江藤 ええ。いや、お仕事のお邪魔をして申し訳ありません。来年もどうぞよろしく願ひいたします

長吉 よろしく願ひいたします

江藤、歩き出したが立ち止り

江藤 そう言えば、清くん。あの件はいかがかな？

清 え？

江藤 青年訓練所の件ですよ

間。

江藤 いよいよ四月から、第一高等小学校の敷地内で始まります。着々と準備を進めてますよ。  
(長吉に) 私も正式に、指導にあたることに決まりましたね

長吉 それはそれは

江藤 この街の勤労青年が、日本男児として心身を鍛えるにふさわしい学び舎にしますから。  
清くんの、勉強したいという気持ちには是非応えたい。待っていますよ

清 ……

長吉 江藤さん、そのお話なんですが

清 僕は、勉強は勉強でも、絵の方を学びたいと思ってるんです

江藤 絵を？

清 はい。家の仕事をしながら学べる学校もありますので、そちらへ入りたいと

江藤 ……ほう

清 せっかくお話を頂いたのに、申し訳ございません

長吉 ……本当に、申し訳ございません

江藤 そうですか。…うん、良い絵を描いて大成されるといいですね。頑張りなさい

清 ありがとうございます

江藤 では辰の家さん、失礼いたします

長吉 はい。どうぞ、よいお年を

江藤、去る。長吉と清、深々とお辞儀をして送る。

長吉 お前、泡食ったじゃねえか

清 ……でも、本当にそうしたいと思ってるんだ。もちろん、入学するには少しばかり金がかかるし授業料もいる。すぐ行けるとは思っていないよ。来年から、夜は、石鹼工場の傍の飲み屋で働く。もう決めて来た。屋はちゃんとウチの仕事を手伝うよ。それで、金が溜まったら学校へ行きたい。学校行きながらウチの仕事もちゃんとやる。絵描きになれるとか、それは分からない。でも出来ることは全部やってみたい。先生に言われたからじゃない。自分でよくよく考えて決めたんだ。頼む。やらせてほしい

清、長吉に頭を下げる。

長吉 ……いいさ、やりたいようにやれ

清 ……本当に？

長吉 しつげえな。本当だよ

清 ありがとう…ありがとう！勝手に決めてすいませんっ！

長吉 なんだ、急に改まりやがって

清 いや、許してもらえろと思わなかったから、びっくりした

長吉 自分で決めたんだからな、言ったことは全部守れよ

清 ああ

長吉 途中でケツを割るようなことしたら、今度はただじゃすまねえぞ

清 分かってるよ。……親父

長吉 ああ？

清 さっき、俺が何も言わなかったら、大家さんに何て言おうと思っただんだ？

長吉 お前が邪魔するから辞めたよ。お前、チンドン屋なんていつ無くなるか分からねえって言ったな。な、ナンセンス？(ぼかして言う)

清 ナンセンスだよ

長吉 ああ。あれから俺も考えた。確かにいつ無くなるか分からねえ。そうかもしんねえ。活動だつてトーカーになったしよ。昔はパカパカお馬ん乗ってたのに、今は電車や車に乗ってんだ。でもな、そんな事言つたら何だつて一緒だよ。お前がやりたい絵だつていつまであるか分かんねえぞ。

清 そうかな

長吉 そうだよ。だからいつ無くなるかなんて言つてもしょうがねえ。俺はこの仕事をする。無くしたくねえ。だからやる。それだけだ

清 そうかい

長吉 ああ

清 何でそんな話したんだよ

長吉 負けてねえつてことだよ

清 (苦笑し) 勝ち負けじゃねえだろう

長吉 うるせえ。……こんな世の中だ。これからは何がどうなるか分からねえ。(清の胸を突き) 心棒をしっかりと持ってやれつて言つてんだ

清 ……うん

長吉 全く、まだ来ねえのか。もういい、始めよう

清 え、でも、後から来たらはぐれちまうよ

長吉 チンドンチンドンやつてりゃ、向つて見つけるよ(歩き出す)

清 そうか

長吉 お前に頼みがあんだけどな

清 何だい？

長吉 そんなに絵を描きてえなら今度から背負いビラ描いてくんねえか

清 あー

長吉 こういうのはどうもダメなんだ。さすがにこれは、自分で見てもマズいやな

清 ホントだね

長吉 なにこの

寅雄、源太が走って来る。源太は鍋や釜のフタを横並びに重ねた物を首から提げており、ガチャガチャとつるさい。二人とも息が上がっている。

寅雄 すまねえ！

長吉 遅いよ！何やってんだ

寅雄 いや家に行ったんだ。そしたら姉貴がもう出たって言うからさ。え、ニコだって言ったか？

長吉 言ったよ

寅雄 そうか。…言ったんだよ（源太を小突く）

源太 イテツ！

長吉 おい、何だそれ

寅雄 鍋釜チンドン

長吉 そら見たまんまだけど、何でそんなもん

寅雄 そんなもんって。言ったじゃねえか、車も多いし、デカイ音の楽器がいるって

源太 俺が作ったんだぜ

寅雄 これなら相当デカイ音が出るぞ。銀座でやったって車に負けねえよ

長吉 バカ野郎。デカイ音が出りゃいいんじゃないやねえよ。ちゃんと歌ってくれる楽器が欲しいんだよ。  
ラッパとかクラリオネットとか、そういう楽器が欲しいんだ

寅雄 そうか、すまねえ。え、言ったか？

長吉 言ったよ！



寅雄 言ったんだよ！（源太を小突く）

源太 イテツ、またあ

寅雄 ラッパ吹けるヤツはまた探すから、今日はこれで勘弁してくれよ。見せて聞かせて買う気にさせりゃいいんだろ？任しとけ

長吉 しょうがねえなあ

源太 親方、坊主、可愛いね

長吉 ん？ああ

源太 俺の顔見てニカニカ笑いやがったぜ

寅雄 なあ、成長が早えよ。もう喋り出すんじゃないやねえか

清 まさか、酒呑童子じゃないんだから

源太 シュナン？誰だい

寅雄 知らねえよ。姉貴、まだ名前がねえつつてたけど、どうすんだい

長吉 こいつが考えるって言うから任せたのに、ぐずぐずしてやがんだ

寅雄 なんだ早く決めろよ。姉貴、もう太郎でいいやつつてたぞ

長吉 太郎はダメだ。長男じゃねんだから

寅雄 そうか。早く決めねえと、長男乗っ取られるぞ

清 アキラがいいと思っただけど。どうかな

寅雄 アキラ？ ああ、親王様にあやかっただか？

清 いや、その字じゃなくて、ハイケイのケイ、一文字でアキラ

沈黙。

源太 ああ、書割のことだな。芝居で役者の後ろに立ってる

寅雄 (源太を小突き)バカ野郎!

源太 イテツ! もっと馬鹿になるじゃねえか?

寅雄 手紙に書く拝啓の「啓」だよ。そうだろう?

清 うん。…いいかい?

長吉 …(うなづき) いい名だ

清 うん

寅雄 ハハハ、口から生まれたアキラちゃんか。こりゃあうるさいガキになりそうだ

源太 チンドン屋にピッタリだね! あ、俺ハナさんに教えに行こうか?

長吉 いいよ。仕事だ仕事! お七夜でもお八夜でも何でもいい。名前は逃げていかねえよ。行くぞ!

一同 ヘーイ

音楽。

長吉、寅雄に旗を渡し、先頭を行かせる。チンドン太鼓に続いて、ゴロス、鍋釜チンドンを鳴らしつつ歩き始める一同。長吉と寅雄が口々に街へ呼びかける。

はい、皆さんに笑顔を届ける辰の家がやって参りましたよ!

本日、地藏坂通り商店街で歳末大売り出しをやりますよ!

お正月の準備はお済みですか?

魚の魚勝は、鯛にシヤケ、ブリにカツオ。お安くしておりますよ!

お師匠さんが走り回ると書いて師走だ! 走って行かないと無くなるよ!

買ったら来年福が来る。呉服屋の柴田屋も三割引きだよ!

など言いつつ去って行く。彼らが去る姿に被って絲川夢子。

絲川 かくして辰の家一行は、昭和八年と共に街並みへと消えてゆく。

この後、昭和十一年の二・二六事件を機に、軍部は却って力を増し、日本は戦争一色へと突き進みます。生活用品は配給制へ。もはや宣伝する物もなくなり、昭和一六年、チンドン屋禁止令のお沙汰。

真珠湾攻撃から始まった泥沼の太平洋戦争を経て、昭和二十年、敗戦となりました。

分かったこと分らないこと、曖昧なことも裾に引きずって、時は移り平成へ。

今、私たちの中に、柱は立っておりませうでしょうか?

そして、あの滑稽鳴り物入り宣伝業チンドン屋はどうなったか? 敗戦の混乱から復活した全盛期。世相に翻弄された衰退期。様々な浮き沈みを経て今、街角に、しっかりと立っております

木が入る。長吉の「よーいっ」の掛け声を機に「四丁目」の演奏の始まり。辰の家を先頭に、出演者、現代のチンドン屋よろしく登場。最後の「挨拶。

— 終 —

● 参考資料

- 大場ひろみ 矢田等「チンドン 聞き書きちんどん屋物語」(バジリコ株式会社)  
堀江誠二「チンドン屋始末記」(PHP研究所)  
綱島徹「ちんどん屋」【写真集】(国書刊行会)  
語り・菊の家々丸「チンドンひとすじ70年」(岩波書店)  
林幸治郎・赤江真理子「ちんどん屋です」(思想の科学社)  
安達ひでや「笑う門にはチンドン屋」(石風社)  
チンドンコンクール50周年記念誌をつくる会「チンドン太鼓が春を呼ぶ街」(有限会社T.C.プロジェクト)  
加太こうじ「昭和事件史」(一声社)、「下町の民俗学」(PHP研究所)、「街の自叙伝」(日本図書センター)  
朝倉喬司「走れ 国定忠治 血笑、狂詩、芸能民族紀行」(現代書館)  
室町京之介「香具師口上集」(続・香具師口上集) (創拓社)  
保阪正康「あの戦争は何だったのか 大人のための歴史教科書」(新潮社)  
井形正寿「特高」(経験者として伝えたいこと) (新日本出版社)  
遠藤織枝「昭和が生んだ日本語 戦前戦中の庶民のことば」(大修館書店)  
加藤秀俊・井上忠司・高田公理・細辻恵子「昭和日常生活史 ①モボ・モガから闇市まで」(角川書店)  
三國一朗「昭和和生活文化年代記 1 戦前」(TOTO出版)  
久保義三「天皇制と教育の史的展開 昭和教育史 上 戦前・戦時下篇」(三一書房)  
アイランズ編「東京の戦前 昔恋しい散歩地図」(草思社)  
原田勝正「図説 昭和の歴史 第4巻 大陸制覇への夢」(集英社)  
大江志乃夫「図説 昭和の歴史 第5巻 『非常時』日本」(集英社)

● 引用

島崎藤村『初恋』

ジャン・アルチュール・ランボー(中原中也訳)『幸福』

上演申請につきましては、左記へメールにて作者本人までお問合せ下さい。

mitanin78@gmail.com